

訂改
帝國讀本
卷八

3759
Ha7
資料室

41718

教科書文庫

4
810
41-1918
200030
2055

Kodak Gray Scale



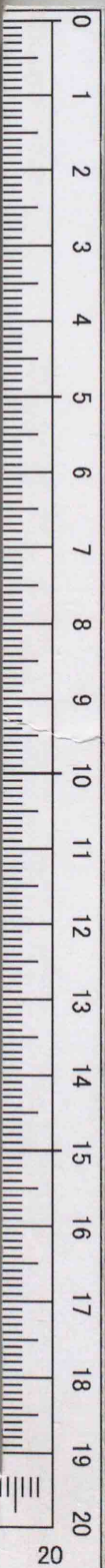
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



大正七年十二月廿一日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

改訂
帝國讀本



東京
合資
會社
富山房發兌



改訂帝國讀本卷八目次

- 一 詠史の歌(韻文)……………一
- 二 妹にさとす(書簡文)……………四
- 三 小品二章……………二
- 四 松下村塾……………三
- 五 月と露……………二〇
- 六 一事一心……………三
- 七 熊野落……………二六
- 八 築山先生に上る(書簡文)……………三四
- 九 魯智深大いに五臺山を鬧がす……………四〇

目次

一〇	支那の風景……………	四六
一一	倫敦塔(口語文)……………	五二
一二	光頼參内……………	五九
一三	宣戰の詔勅 其の一……………	六六
一四	宣戰の詔勅 其の二……………	六九
一五	小鍛冶……………	七五
一六	小 謠(韻文)……………	八二
一七	舉國一致(口語文)……………	八五
一八	邦人の性情……………	八八
一九	有王島下り 其の一……………	九二
二〇	有王島下り 其の二……………	九九
二一	奥の細道 其の一……………	一〇三

二二	奥の細道 其の二……………	一〇七
二三	蕉風の開眼……………	一一三
二四	今様五題(韻文)……………	一一八
二五	頼山陽 其の一……………	一二〇
二六	頼山陽 其の二……………	一二七

自 讀 文

一	芭蕉翁の臨終……………	一三三
二	著作の苦心……………	一三六
三	西哲訓言(格言)……………	一四〇
四	古學の傳統……………	一四六

卷八目次終

改訂帝國讀本卷八

一 詠史の歌

わたの原島の八十島四方の國

本居宣長

光あまねく天てらす神

高崎正風

みとらしの弓筈にとまる鷁の羽の

輝くものは稜威なりけり

渡忠秋

(二) 近江の人。香川景樹の門に。明治十四年歿。

(一) 鹿兒島の人物。明治天皇に仕へたり。歌所長。官たり。明治十五年歿。



(一) 備中の歌人。
通稱本太郎。

(二) 歌人。周防の
宮内省文
御掛とな
る。明治十
三年。寄居
の著者。
談年等の著
り。

大宮にもりつる雨や大八洲

もれぬ恵の初なりけん

小野務

物ごとに改りぬる御代なれば

雉子もおのが色をかへけん

よみ人しらず

さざ浪の志賀の大わだよどめども

つひにはもとの流とはなる

小野務

誰知らぬ人こそなけれ冬の夜に

ぬぎし衣のあつき心は

近藤芳樹

(一) 備前兒島の歌
人。通稱武左
衛門。

胡蝶の夢

(二) 後鳥羽天皇隱
岐にての御詠
一我こそは新
島守よ隱岐の
海の荒き波
風心してふ
け。(増鏡)

(三) 鹿兒島藩士。
香川景樹の門
人。明治六年
歿。年七十五。

玉すだれ雪にかゝげし頃よりや

をしき跡も消えそめにけん

野崎 弼

薪こる鎌倉山の風の音に

あへず胡蝶の夢はさめけり

小野務

隱岐の海の荒き浪風今こそは

吹きかへしつれ船上の山

大矢真弓

花さかん春をたのみに畏くも

吉野の奥に宮居ましけん

八田知紀

大空にかけりし龍の末つひに

四方の海さへ呑まんとぞせし

加藤千蔭

皆人のとざさぬ御代になりぬるも

關が原こそはじめなりけれ

二 妹にさどす

吉田松陰

此の間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にて頂
き候やうとの御事、御親切の御志感じ入り申候。精進、潔齋な
どは、随分心のかたまり候ものにて宜しき事と存候につき、
拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候ひて、酒
肴など一向食べ申さず候。其の間一度靈神様御祭のもの頂

(一) 松陰の長妹千代、安政三年四月十三日、松陰の獄中にて野山此の書を認む。

精進潔齋

戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかし
しき事にも之なく、御親切の事に候へば、相果し度存候處、當
所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候ひては、連
中又は番人ども、何故と怪しみ尋ね申すべく候につき、それ
をそれと相答へ候事、面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれ
ば、其の日に一日に頂き申候。

抑、観音様信仰せよとの事は、定めし禍をよけ候爲なるへ
く、是には大いに論のある事に候へば、委細申し進ずべく候。
法華經第二十五の卷、普門品と申すに、観音力と申す事、高
大に述べて之あり候。大意は観音を念じ候はゞ、繩目に懸り候
ひても、忽ちぶつ／＼と繩が切れ、人屋に捕はれ候ひても、忽
ち錠鍵が外れ、又首の座に直り候ひても、忽ち刃が干々に折

首の座に直

退轉

大乘小乘

上下根

ひたもの

るゝなど申して之あり候。是は拙者江戸の人屋にて、此の經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終此の趣に候。其故、凡人は之より有難き事は無しとて信仰するも無理は無く候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘、小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定め之あり候。小乗にては、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。之は人に信を起さする爲なり。信を起すとは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すも此の事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨みても、ちつとも頓着無く、繩目も、人屋も、首の座も平氣になられ候故、世の中に、如何に難題、苦患の來るとも、それに退轉して不忠、不孝、無禮、無

不退轉

道等仕る氣遣はなし。されど初より凡夫に、一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故、かりに觀音様を拵へて信を起させ候教に御座候。之を方便とも申候。



吉田松陰

さて又大乗と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申しても、立身出世など申す事には御座なく候。

生老病死

其の初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の
強き人にて、老人を見ては、我が身も往くさきは老人になら
んかと悲しみ、死人を見ては、我が身も往くさきは死なんか
と悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを
發し、生老病死が此の世の習なれば、是非に此の世を出ねば
すまざと志を立て、年二十五の時位を棄て、山に入り、右
の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候ひて三十出
山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れ
もせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で來
て、それより世の人を教化せられたり。是が即ち出世法なり。
故に、出世せずては濟世の出來ぬと申すも此の事なり。濟世
といふは、即ち此の世の人を濟度する事に御座候。

濟度

さて其の死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申
す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば有
難がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死な
ぬ人なれば、繩目も、人屋も、首の座も、前申す觀音經の通りに
は候はずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人々は、刃もの
に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀
の千々に折れたる證據なり。

塞翁が馬

さてまた、禍福は繩の如し。といふ事を御悟りなるが宜し
く候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座
候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなものに
候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の
世へも残り、かつ、死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、

福此の上も無き事に候。人屋を出て候へば、また如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論其の禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の効驗も無き事に、觀音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず無益に存候。されば拙者の氣遣に、觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟の中一人にてもふさまのわるき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りに此の世の禍を受合ふ故、兄弟中は拙者の代りに、父母様へ孝行してくるゝがよし。

ふむむ

さすれば、つゝまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父母様の御仕合、又子供が見習ひ候へば、子孫の爲是程めでたき事はなきにあらずや。よくよく御勘辨候ひて、小田村、久坂などへも此の文御見せあるべし。佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬ様に、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本に、

のどけさよ願なき身の神まうで

神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。

—俗簡襟輯—

三 小品二章

風 鈴

香川景樹

月の晴渡り、花の散行く時々を告ぐる、いとあはれなり。か
の入相、曉打定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る

照る日かげ
ろふ

日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめき出でし夕暮に聲あはせたる、物にも似ず。

砧

清水濱臣

近しと聞けば遠し。遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧を誘ふにやあらん。砧の音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもそも此の音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つ折の憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。

四 松下村塾

徳富蘇峰

鼓吹

吉田松陰は天成の鼓吹者なり。感激者なり。彼自ら己を空しうして他の善を採るを禁ずる能はざるのみならず、又他

綱常
彝倫

をして覺えず自己の精神意氣に同化せしむるを禁ずる能はざらしむる力を有す。これ彼が教育家としての特色なり。其の踏海の策破れて下田の獄に繋がるゝや、獄卒に説くに自國を尊び、外國を卑しむ、綱常を重んじ、彝倫を叙すべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。其の下田より檻輿江戸に赴き、途三島を経るや、警護の下人に向ひ大義を説き、人獸相距る遠からざる彼等をして、憤勵の氣色に現れしめたり。其の江戸の獄に在るや、いふまでも無し。後送られて長門野山の獄に投ぜらるゝや、其の感化は同囚者に及び、獄卒に及び、遂に其の司獄者までも彼が門人となるに至らしめたり。彼が在る所四圍みな彼が如き人を生ず。これ何に由りて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。

聖壇

而して彼が最も其の鼓吹者たり、感激者たる特質を顯したるは、松下村塾に於て之を見る。
松下村塾は徳川政府顛覆の卵を孵化したる保育場の一たり。維新改革の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふなかれ、其の火燐よりも微に、卵豆よりも小なりと。赤間關の砲臺は粉にすべし。奇兵隊の名は滅すべし。然れども松下村塾に至りては、獨り當時に偉大なる結果をのこせるのみならず、流風遺韻今に迫んでなほ人をして欽仰歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり。

彼は安政二年十二月野山の獄より出でて、家に蟄居せしめられたり。而して其の安政三年七月に至つては、蟄居中更に家學を授くる許を得たり。其の名義とする所は山鹿流軍

襲用

學なりと雖も、其の實は然らず。彼はいはゆる専門的兵法家にあらず。彼は改革家なり。其の教ふる所は改革の精神なり。其の講ずる所は改革の偉業なり。

松下村塾の名は其の内叔玉木、外叔久保等が相接して其の村學に用ひたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人がいはゆる松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。蓋し松陰が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅かに安政三年の七月より安政五年の十二月までにして、即ち其の歲月は二年半に過ぎず。而して此の二年半の歲月が、未來に於ける日本の歴史に千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。彼は何を以てかくの如き大感化を及したるか。曰く、其の人に在り。曰く、其の時勢に在り。曰

幽明を窮む
白面の書生

く、其の教育の目的に在り。曰く、其の教育の方法に在り。
彼は精を窮め微に入る白鹿洞の先生に非ず。彼は僅かに二十七
呑み幽明を窮むる橄欖林の夫子に非ず。彼は僅かに二十七
歳の壯者にして、要するにこれ白面の中書生のみ。彼が實力
よりも多くの感化を人に及し、彼が人物と匹敵する或點に
於ては寧ろ彼より優れる弟子を出したるは何ぞ。感在知己。
の一句これを説明して餘りあるべし。

彼は造化兒の手に成りたる精神の爆裂彈なり。一たび物
に觸着すれば轟然として火星を飛ばす。此の時に於ては物
も亦碎け、彼も亦碎く。彼の全體は燃質を以て組織せられた
り。火氣に接すれば忽ち焰と爲る。其の焰と爲るや銀も鎔す
なり。金も鎔すなり。瓦も鎔すなり。彼の人に接するや全心を

舉げて接す。彼の人を愛するや全力を舉げて愛す。彼は往々
インスピレーションの爲に精神的高潮に上る。而してこれ
を以て他に接し、他を導いて此の高潮に接せしむ。知るべし、
彼が教育の道多岐無し、たゞ己が眞骨頭、大本領を據べて以
て他に及すのみなるを。

Johann
Heinrich
Pestalozzi.
瑞西の教育家
慈善家。西曆
一七四六一一
八二七

軒輊

彼は變則なるペスタロッチなり。彼は實物教育の大主義
を踐行せり。たゞペスタロッチに異なるは、一は天地萬有を
以て實物教育の資と爲し、他は活世界の時事を以て實物教
育の資と爲したるのみ。其の嬰兒の如き赤心を以て其の子
弟を愛し、自ら彼等の仲間と爲り、彼等の中に住し、彼等の心
の中に住するに至りては、二者豈軒輊あらんや。
彼の門人を遇する一に赤心を以てす。至誠にして動かざ

るもの未だこれ有らずとは、彼が人に接し物を待つ金誠なり。彼は能く言ふよりも、寧ろ能くこれを行へり。單に此の一點に於ては、東西古今を通じて彼に優る教育家を見出すこと決して容易の業に非ず。而して此の精神を以て其の所信を他に施す。故に其の傳道心に至りては、此の山を彼處に移す程の勢力ありしなり。彼が眼中敵も無く、味方も無く、たゞ彼が濟度すべき衆生あるのみ。彼は社會の寵兒に非ず。彼が子弟も亦然りき。彼等は恰も雪を踏んでアルプス嶺を攀づる旅客の如し。其の隆凍苦寒を凌がん爲には、互に負載し、抱擁し、自他の體溫に依りて其の呼吸を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に倒れて弟子後に振ふ。彼は知己の感を以て其の子弟を陶冶せり。彼は活け

る模範と爲りて、子弟に先だちて難に殉ぜり。否子弟の爲に難に殉ぜり。此の時に於て懦夫と雖もなほ起つべし。況や平生の素養ある者に於てをや。況や恩愛の情知己の感ある者に於てをや。彼は其の子弟に向つて我が如く倣せといへり。而して倣せり。彼等豈徒然として止まんや。

其の時を以てすれば二年半に滿たず。其の處を以てすれば萩城の東郊に在る杉氏邸内の八疊の矮屋にして、其の特に増築したるものも、別に十疊半の一室を加へたるに過ぎず。しかも此の中より無數の活劇と活劇を爲せし大立者とを出したる所以のもの、豈其の由る所無くして然らんや。世或は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。個人の社會に及す勢力もまた輕視すべからざるなり。

— 吉田松陰 —

ばかり

五月と露

吉田兼好

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかり面白きものはあらじ」といひしに、又ひとり「露こそあれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折にふれば何かは哀ならざらん。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をも分かずめでたけれ。^(一)「沅湘日夜東に流れ去る。愁人の爲にとゞまる事しばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそ哀なりしか。嵇康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば心樂しぶ」といへり。人遠く、水草清き處にさまよひありきたるばかり心慰む事はあらじ。

^(一)唐の戴叔倫の詩。盧橘花開楓葉衰。出師門何處望三京。師沅湘日夜東流去。不爲愁人住。少時爲竹枝。那呼竹枝郎。七賢隱士。此の文は友人山澤に贈る句。

ゆるづき

そぼつ

空だきもの

追風

あやしみの竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に色あひ定かならねど、つやゝかなる狩衣に濃き指貫いとゆるづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して遙なる田の中の細道を稲葉の露にそぼちつゝ、分行く程、笛をえならず吹きすさびたる、哀と聞知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつゝ、行けば、笛を吹きやみて、山の際に總門のあるうちに入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、しかくの宮の在します比にて、御佛事などさぶらふにや。といふ。御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風に誘はれくる空だきもの、匂も身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の追風、よういなど、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心の

かごとがま

まゝに茂れる秋の野らは置餘る露に埋れて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲の往來も早き心地して、月の晴れ曇ること定め難し。——徒然草——

六 一事一心

吉田兼好

因果の理

世渡るたづ

或者子を法師になして、學問して因果の理をも知り、説經などして世渡るたづきともせよ。といひければ、教の儘に説經師にならん爲に、先づ馬に乗習ひけり。輿、車もたぬ身の導師に請ぜられん時、馬などにて迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。此の業、やう

桃尻

檀那

境に入る

やう境に入りければ、愈よくしたく覺えて嗜みける程に、説經習ふべき閑なくて年よりにけり。

あられます

此の法師のみにもあらず、世間の人なべて此の事あり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて打怠りつゝ、先づさしあたりたる目の前の事にのみに紛れて、月日を送れば、ことごとくなす事なくして、身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へゆく。されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事のなかに、いづれか優るとよく思ひくらべて、第一のことを案じ定め

て、其の外は思ひすて、一事を勵むべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來らんかに、少しも益のまさらん事を營みて、其の外をば打捨て、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば碁をうつ人、一手も徒らにせず、人に先だちて、小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨て、十の石につく事は易し。十を捨て、十一につく事は難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多く優らぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて既に行着きたりとも、西山に行きて其の益まさるべき事を思ひ得たらば、門より

歸りて西山へ行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、此の事をば先づいひてん、日をさゝぬことなれば、西山の事は歸りて又こそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これをおそるべし。

一事を必ず成さんと思は、他の事の敗るゝをもいたむべからず。人の嘲をも耻づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

人の數多ありける中にて、或者、ますほの薄、ますほの薄などいふ事あり。渡の邊の聖、此の事を傳へ知りたり。と語りけるを、登蓮法師其の座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やあるかし給へ。彼の薄の事習ひに渡の邊の聖のがり尋ね罷らん。」といひけるを、餘りに物騒がし。雨やみてこそ。と

(一) 播磨國邊の邊
は今の大阪な
り
(二) 傳不明。詞花
集以後の十一
代集に其の名
見ゆ
がり

人のいひければ、無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に聖も失せなば、尋ね聞きてんや。とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゝしく有難う覺ゆれ。敏き時は則ち功あり。とぞ、論語といふ書にも侍るなる。此の薄を訝しく思ひける様に、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。 — 徒然草 —

七 熊野落

(一) 後醍醐天皇の第三皇子親王の延暦寺の大塔に在りしより大塔宮といふ。
(二) 奈良市外に在り。
虎の尾を履む恐

大塔宮(一)二品親王は笠置の城の安否を聞し召されん爲に、暫く南都の般若寺(二)に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しと雖も、御身を隠さるべき所

鶉の床

(一) 奈良興福寺の北に在りし同寺末寺の一。

なく、日月明らかなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に御心を悩まされ、何處とても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはと思し召されける所に、一乘院(一)の候人按察あさち法眼ほふけん好專如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折節、宮につき奉りたる人一人も無かりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべき様もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さらばよし自害せん。と思し召して、既におしはだ脱がせ給ひけるが、事叶はざらん期に臨んで腹を切らん事はいと易かるべ

期

隱形の呪

し。若しやと隠れて見ばや。」と思し召しかへして、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。此の蓋を明けたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、其の上に御經をひきかづきて、ま隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刃を抜いて、御腹にさし當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るも尙淺かるべし。

これ體

さる程に兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二

夢に道行く心地

つを開けて御經を取出し、底を翻して見けれども、おはせず。「蓋開けたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命を續がせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若し又兵の立歸り委しく搜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。」とて、御經を皆打移して見けるが、からからと打笑うて、大般若の櫃の中をよくく(一)搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘(一)三藏こそおはしけれ。」と戯れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。是偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり。」と信心

(一)支那唐代の高僧。印度に入りて大部の經文をとりて歸れり。(六六四)一六六四

冥應
信心に銘す

(一)紀伊國牟婁郡

眉半ばにせむ

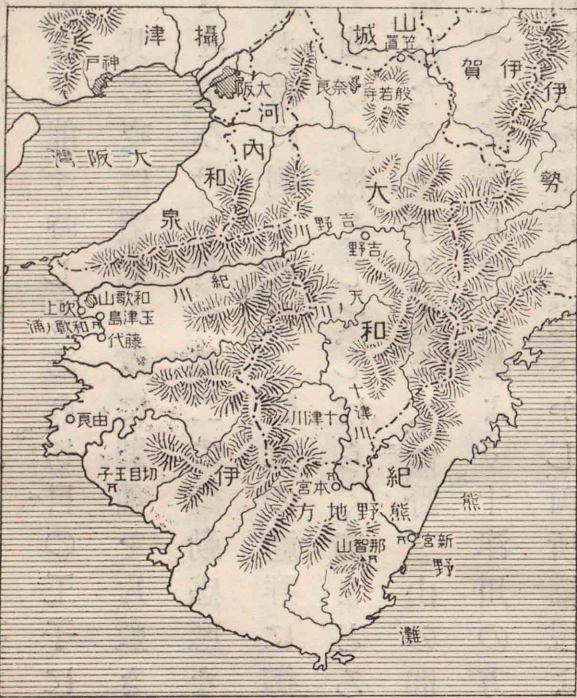
龍樓鳳闕
華軒香車

肝に銘し、感涙御袖をうるほせり。かくては南都邊の御隠れがも叶ひ難ければ、即ち般若寺を御出であつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼是以上九人なり。宮を始め奉つて、御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、其のなかに年長せるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。此の君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定め、て叶はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねど、怪しげなる單

勤修

(一)紀伊國日高郡にもあは淡路津名郡の和歌山對岸の浦の濱ゆふ

(二)紀伊國海草郡
(三)海草郡和歌の浦
(四)同所附近



皮、脚巾、草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達も見咎むる事なかりけり。由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の櫂をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山、渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌、吹上をよそに見て、月

(一)同所附近。さらでだに長汀曲浦雨をふくめる孤村の樹夕を送る遠寺の鐘
(二)日高郡。王子の社は熊野大神の末社なり。
御袖を片敷く

(三)紀伊國東牟婁郡。三山は本智宮、新宮、那智。
(四)大和郡吉野郡。熊野川の上流。

にみかける玉津島光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。
其の夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御臑を曲げて枕として、しばらく御まどろみありける御夢に、鬢結ひたる童子一人来て、熊野三山の間は尙も人の心不和にして、大義成り難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて、時の到らんを御待ち候へかし。両所權現より案内者に附進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すと御覽せられて、御夢はすなはち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、た

のもしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

高峯の雲に枕を欹つ
岩漏る水に渴を忍ぶ
空翠

其の道の程三十餘里が間には、絶えて人里も無かりければ、或は高峯の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁、劔に削り、見下せば千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥れ果て、流るゝ汗水の如く、御足缺損じて草鞋皆血に染まれり。御供の人々も其の身鐵石にあらざれば、皆々饑疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に十津川へぞ着かせ給ひける。

— 太平記 —

八 築山先生に上る

幸便に任せ、一筆申上げ奉り候。殘暑の節益、御勇健に御座遊ばされ候ことと存じ奉り候。

去臘

去臘は色々と御世話下され、御別の刻も御親切の條々、肝に銘じ忘れ難く候。さて此の度内々心事申上げたき儀これ

(一)頼春水。

粉骨壅身

あり候。誠に父儀(一)土民より御取立を被り、外諸士よりも、御國恩海山に御座候へば、其の子たるもの、粉骨壅身仕候て御奉公申すべき筈に御座候ところ、只今の身分に相成り、いたし方これ無く、また假令再び御使ひ下され候儀萬一出來仕候とも、生得多病弱質、すこしの事にも耐へかね候故、甚だ覺束無く、強ひて相勤め候ては、却つて事を傷り、不忠不孝を増し

候やうのこと出來致候やも計り難く、且また私一家重疊に官祿を忝う仕候ゆる、一人は浪人仕る方天道にもかなひ申すべく候はんか。また奉公仕らずとも、御報恩の致方これ無しとは申すべからず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學、文學に御座候。これにて少々なりとも御國の御用に相立ち候儀仕度、乃ち籠居以來、日本外史と申す武家の記録二十二卷著述成就仕居り候へども、これは區々たることにて、引用の書ども不自由、私心に滿ち申さず候。愚父壯年の頃より、本朝編年の史輯め申度志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ばかり致し置候まゝにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候故、父の志を繼ぎ此の業を成就つかまり、日本にて必要の大典は藝州の書物と、人に呼ばせ申したき念願

に御座候。此の儀三都に居り申候て、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取り申さず候ては出來仕らぬことに御座候。水戸の日本史なども、江戸に史館御建て遊ばされ候は、此の譯に御座候。不肖の私に御座候へども、右の場所へ出でて、名儒俊才に附合も致し、學業成就名を天下に揚げ、未代までも、藝州に何某」と呼ばれ候は、螢火にて月光を増し候譬にて、少しは御國の光ともなり申すべきか。

去冬此の方へ參り候件、私好み申さざる事に御座候へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕難く、急に追立てられ罷越し候。誠に草原にて、馬子牛飼の外は談話仕候べき人もこれ無く候。廣島に居り候ひし節は、又時節もこれあり候は、都會へ出づることもやと空頼に存候ひしが、今は

其のたのみも絶果て候故、日夜悲歎仕居り候。

(一)備後國福山藩。藩主は阿部氏。

(二)詩人。菅茶山。

然る處福山の公邊にて私を取放し申さざるやうと、役人共かれこれと談合つかまり、私に知行取らせ、士儒に取立て申度旨、内意菅先生より申聞かせられ候。先生には、私所存をば承知これ無く、承引仕るべき旨勸められ候。私答へ候に、これは案外の事を承り候。私奉公出來候身に候は、本國にて仕り申すべき筈なれば、如何やうの御勸にても、決して従ふべきやう御座無し」と答へ候に、これは小國ゆゑきらひ候か。小國にても俸祿はよろし」と申され候ゆゑ、私は義の一字を申候。義に協ひ申さざる儀に候は、假令加賀、薩摩より所望にあづかり候とも、見向も仕らぬ料簡に御座候。大恩の本國に尺寸の勞をも盡し申さず、他國にておめしと出仕候こ

と、私畜生ならば知らず、苟も人にて御座候うへは、何の面目にて、天下の人に對し申すべきか。と申切候。右様の儀は幾重にも相斷り、此の方申分相立て候こともこれあるべく候へども、私多年の願望遂げ候期は、これ無きやうに相見え候。何分年少氣銳のうち、一度大處へ出で、當世の俊才と呼ばれ候者共と勝負を決し申したく存奉候。家父叔父共は御承知の氣遣手に御座候ゆゑ、とかく手放し候こと致しかね、爰許にても、兄弟同様の太中にあづけ置き、其の内に年も寄り候はゞ、分別をほり申すべしと心組み候へども、私は若氣のみにてはこれ無く、前段の大志御座候故に御座候。此の念願と申すも、人に少しも世話をかけ、物入をさせ候こともこれ無く、たゞ一言の許を受け候はゞ、私一分の

(一)春水、杏坪等。

才覺を以て一人口食ひ候ことは、如何ともつかまつり、家元よりの仕送等は、一錢も煩はし申さぬ積に御座候。家父老年に相成候て、他處へ罷越し候儀、いかゞに御座候へども、此處に居り候も、京大阪へ參り居り候も、五十歩百歩のちがひに候。此處にかれこれと月日を積み候うち、菅先生養育の恩義は日々重り候て、去難く相成り申すべく、さりとても、多年の念願無に仕候も、殘念至極、いかゞ仕るべきかと案じ煩ひ居り申候。何卒尊公様の御憐愍にて、人一人御救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは、出來申すまじくや。さ様にも相成候はゞ、英氣は百倍仕り、多病の身も學問出精天下の人に一人も追付かせ申さゞる料簡に御座候。か様の存念廣島に居り候ひし節より申上度存じながら、

勘辨

憚多く、時節も到來仕らずと存じ、黙止仕居り候へども、尊公様ならでは此の儀御決斷下され候人はこれ無く候故、此の度憚を顧ず、生涯の浮沈と覺悟相極め申上候。懼れながらよく御勘辨下され、何卒尊公様の御心附として仰せ出され下さるべく、もし尊公様御取計にて私生涯の大望御遂げさせ下され候はゞ、此の御恩生々世々忘却仕るまじく候。心事盡しがたし、萬々御推察あそばされ下さるべく候。頓首、敬白。

九 魯智深大いに五臺山を鬧がす

魯智深は五臺山を望みて走る程に、やがて丘腹の亭上に到り、しばし憩ひてありしが、酔いよく、湧上りつ、勢にまか

せて身を跳り起し、われ久しく相撲やはらをなさゞれば、身體すべて倦疲れたり。さらばちとの力だめしをもせばや。とて、只一息に亭の柱を動かせば、猛にぐわらくと響きわたり、柱は中より折れて、亭の半ば既にめり込みぬ。時に山門の門守、此の物音を聞きつけて深く怪しみ、高きより見おるせば、彼の魯智深、踉々として山に上り來つ。二人の門守打驚き、山門を鎖しかためて、扉の裏よりさしのぞけば、魯智深拳を揚げて門を敲くこと、鼓を打つが如く、あけよ。と叫べども、門守敢へて開く事なし。其の時魯智深は身を扭向け、左手に立てる仁王を見て、聲ふりたて、喝りけるは、汝、此のえせ大漢子、われに代りて門を敲かんとはせず、却りて拳を握りつめて、我を威すとも、われ少しも汝を怕れず。いで手

なみの程を見すべし。といひもあへず、臺石に跳り上り、忌垣をかき搦みて葱を抜く如くに引抜き捨て、折れ材木を閃かしつゝ、仁王の腿を丁と打てば、胡粉の彩色すべて剥げたり。門守は此の光景を窺ひ見て大いに慌て、まづ長老に告知せんとて、忙しく走り行きけるが、魯智深は又身を取直して、右手なる仁王を喝りつけ、汝、大なる口を開きて、我を笑ふは何事ぞ。からきめ見せん。と罵りつゝ、かの仁王の脚の上を、力にまかせて打ちしかば、一聲地も震ふばかりの響して、仁王はどうと顛び墮ち、臺石の下に倒れにければ、魯智深かやくと打笑ひ、且罵り、且叫び、なほ外面に佇みけり。

かくて二人の門守は、魯智深が體たらくを長老に告げたてまつれば、長老の宣はく、汝等漫にさわがして、彼を怒らす

異口同音

ことなかれ。とく退ん出よ。と命ずる折しも、首座、監寺、都寺、すべて職ある僧人ばら、方丈に來りて稟すやう、彼の野猫今日も又いたく酔ひて、丘上の亭と山門の仁王を打壊れり。こはいかにしてよからん。と異口同音に訴ふれば、長老聞しめして、古より天子すらなほ酔漢を避け給ふ。況や我が力争ひ制すべきにあらず。よしや仁王を打壊るとも、彼が施主趙員外に請ひて新に塗らせ、亭をも修復せさすべきのみ。汝等彼が前日の手なみを見ずや。と宣へば、衆僧せんすべなくて、方丈を退き、門守を呼びて、彼ものいかにいふとも、門をな開きそ。とぞ仰せける。さても魯智深はしばし佇みてありつれども、とかく門を開かざれば、大いにいらだち、此のたはけたる禿顛ども、我を

いきまわりの
らく

寺内に入れじとならば、火を把來りて山門をば忽ちに焼くべきぞ。といきまきあらく罵れば、僧衆これを聞きて大いに驚き、ふたゝび門守を呼んでいふやう、もし入れざる時は、彼いよく不良の行をなさん、も量り難し。先づ門を開きて其の爲ん様を見よ。といへば、門守心得て、おそるゝ、手を長く伸し、門の栓を引抜きて、飛ぶが如くに隠れしかば、僧衆も身を避けて、遠くより之を見る。魯智深は貫木を引抜く響を聞き、力を盡して一推おせば、門扉左右へさとひらけ、顛び入りつゝはたと倒れしが、やがて身を起して僧堂に走り入り、選佛場の中に到れば、坐禪の所化たち大いに驚き、頭を低れて居たりけり。

所化

時に都寺、監寺等は、長老にも申さずして、一列なる執事の

心頭火焰

口角霹靂

やにはに

僧人ばらを呼びつどへ、老郎、寺男、堂守、轎夫等約一二百人を驅催し、手に杖棒などを引提げつゝ、手巾をもて鉢卷し、皆諸共に打入りて、左右なく智深を捉へんとす。魯智深は之を見て大いに怒り、別に打物なかりし程に、佛前なる卓の脚兩條を引抜きて、まつしぐらに跳り出でたり。其の光景、心頭に火焰起り、口角に霹靂鳴る。正にこれ箭に中りて崖をわたる虎豹の如く、恰も槍を着けて澗をこゆる豺狼に異ならず。東を指しては西を打ち、南を指しては北を打つ。其の勢、燦然として敢へて當るべくもあらざれば、やにはに傷を被るもの十餘人に及びけり。

魯智深はなほ荒れに荒れて、本堂のほとりに追ひ到り、と見れば長老立出で給ひて、智深無禮なせそ。僧衆も手を動か

すべからず。」と制し給ふ。衆人は今長老の出給ふを見て、おのおの退き隠れし程に、魯智深も卓の脚を投捨て、長老わが爲に裁き給へ。」と申せしが、此の時酔は七八分醒めにけり。

長老は魯智深を近く招き、汝連りにわれを苦しめ、前にも酔ひて不善の行ありしをもて、趙員外に告知らせしかど、員外書簡もて、さまざま僧衆に詫言しつるによりて、其の儘にさしおきぬるを、今又酔ひて丘上の亭を打毀ち、且山門の仁王を打壞り、しかのみならず衆人を打擲す。其の罪業小さきにあらず。我が此の五臺山は文殊菩薩の道場にして、千百年清淨の靈地なるに、いかで汝が如き汚れたる者を住はせおくべき。今われ汝をさし遣はす處を安排せんに、われに従ひて來よ。」と仰せて、魯智深を方丈に伴なひ、職事僧人をよびて、

打傷られたる者を養生させ、次の日長老は首座と商議し、まづ趙員外に消息して、情由じやうゆを告げ給へば、員外大いに打驚き、「亭と仁王はそれがし早速修復いたすべし。魯智深が事はとかく長老の裁にまかせて、寺の規に従ひ奉るべし。」と返事書い認めて、其の使に寄せたりしかば、長老やがて侍者の僧を呼びて、黒染の直綴、一隻の僧鞋、十兩の白銀を取寄せ、魯智深を召出して彼の品々を賜はり、汝、兩度まで靈山を鬧がせて佛法を蔑にす。其の罪輕からずといへども、施主趙員外の面皮を虧かんとほしさに、われ一封の書簡を贈りて、汝を遣はすべき處を安排せり。且われ夜來汝の始終の事を看了りたれば、四句の偈を説示して、後の戒とすべし。汝身を終るまでうけ用ひよ。」と宣へば、魯智深畏みて、深く其の慈悲に感激

いふはし

偈

し、長老願はくは其の偈を示し給へ。」と請求む。嗚呼此の長老、透徹にしてよく人を哀憐し、道高機智にして未來を説くに、一點も錯ふ事なし。宜なるかな、彼の魯智深、禪杖を揮ひては、天下の英雄豪傑と戦を決し、怒りて戒刀を掣く時は、世上の逆徒讒臣を斬殺し、名は塞北の三千里に揮ひ、佛果は江南第一州にぞ得たりける。

—瀧澤馬琴譯、新編水滸畫傳—

一〇 支那の風景

内藤湖南

京津地方は其の趣朔漠に近く、我が邦に在りては比照すべき地なし。^(一)上海、蘇州は平野の中に在りて猶大陸の風あり。利根沿岸地方に類して、更に宏濶を加ふ。獨り杭州地方は山迫り、海繞りて、地勢逼隘、頗る我が邦に似たり。城壁は女蘿蔓

(一)北京と天津。
(二)江蘇省松江府支那第一の貿易港。
(三)江蘇省の首府。古の姑蘇府。
(四)浙江省の首府。

(一)浙江省杭州府に在り。

澄瑩

土瘦せ石秀

軟媚

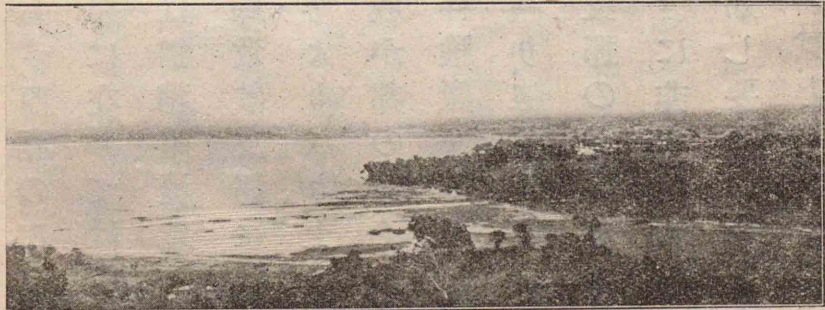
(二)揚子江の上流の勝地。
(三)四川省蜀に入る棧道。
(四)天山地方。
(五)福建。廣東。

莽蒼宏豁
細膩

延、翠色滴らんとし、亦北方枯燥の比にあらず。^(一)西湖のごときは其の景致殆ど我が京畿、中國に類し、支那に在りては明媚秀麗の最たるもの。而も我が邦に比すれば、猶稍暗澹たるを免れず。我が瀬戸内の如き澄瑩秀朗なる風致は、支那には殆ど求め難きものなるべし。其の山は皆斷層より成り、土瘦せ、石秀づ。是西湖の軟媚を以てすら尙然り。我が邦の如く土壤墳起して、細波起伏の状を爲し、山容の温粹雅麗なるものは、絶えて見ることをなし。我未だ三峽の險を溯り、^(二)劍閣の危を踏まず、未だ流沙の難を經、^(三)閩、粵の潮を觀ず。支那の風景を縱談するは、夏蟲の氷を語るに似たるものなきに非ず。但し其の過ぐる所に就いて憶斷すれば、實に此の如し。要するに、其の長は莽蒼、宏豁、雄健、幽渺に在り、明麗、秀媚、細膩、委曲に在らず。

(一)南京。

之を譬ふれば、蔗稈を噉むが如く、漸く佳味に値ふ。我が邦の景の糖蜜を嘗むるが如く、齒牙皆甘きが如きには非ざるなり。雄大なるは金陵(一)の形勝なり。蓋し京津地方の如きは莽蒼はこれあり、而も其の山甚だ遠きが爲に、反つて雄偉の感に乏し。杭州の如きは明麗はこれあり、而も其の甚だ近きが爲に、全く雄偉の趣なし。金陵の地山甚だ遠からず、又甚だ近からず、蒼翠縈繞して時々其の角を缺く處、更に幽遠際なき思を生ぜしむ。且鍾山の如きあり、甚だ大ならざれども、而も雄特の姿



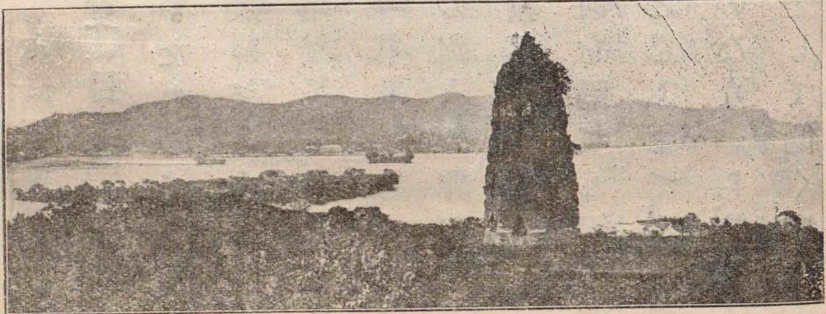
西

縈繞

(一)明の太祖の廟。

に富む。野色遠近、高城百里、孝陵廟より朝陽門に至る高原に馬を驅れば、坐るに千軍萬馬を馳驅して旌旗野を蔽へる古英雄を想はしむ。我同行の士に語つて曰く、「金陵に總督として謀叛氣の起らざる如き人物は、其の人必ず庸愚なり。」と。武昌の形勝は湖廣の沃土を控へ、亦甚だ雄偉なり。然るに其の地金陵上流の雄鎮として一方を制馭するに宜しくして、以て帝王の州と爲すべからず。黃鶴樓址若しくは龜山の頂に登らん者は、轉、吾が言の河漢ならざるを知らん。

—燕山楚水—



湖

河漢ならざるを知らん

一一 倫敦塔

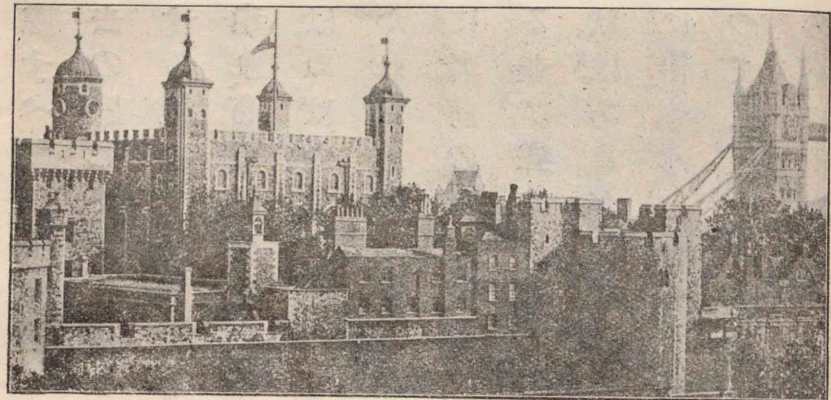
夏目漱石

龕中の幽光

時の流

倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じつめたものである。過去といふ怪しき物を蔽へる帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流が逆に戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來つたとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬車汽車の中に取殘されたのは倫敦塔である。

此の倫敦塔を、塔橋の上から、テームス河を隔て、眼の前に望んだ時、余は今の人が、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひながら、物靜な日である。空は灰汁桶を搔交ぜた様な色をして、低く塔の上



塔 橋 と 敦 倫

に垂懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いて居るかと思はれる。帆掛舟が一隻、塔の下を行く。風のない河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白い翼が、いつまでも同じ所に停つて居る様である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。たゞ一人の船頭が艦に立つて、櫓を漕ぐ。是も殆ど動かさない。塔橋の欄干の邊には、白い影がちらちらする。大方鷗であらう。見渡した

處、すべての物が靜である、物憂げに見える、眠つて居る、皆過去を感じである。さうして其の中に冷然と二十世紀を輕蔑する様に立つて居るのが、倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史のある限りは我のみはかくてあるべしと言はぬばかりに立つて居る。其の偉大なものには、今更の様に驚かれた。此の建築を俗に「塔」と稱へて居るが、塔といふのは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つた大きな地域である。並び聳えてゐる櫓には圓いもの、角張つたもの、色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓つてゐる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうして其を蟲眼鏡で覗いたら、或は此の塔に似たものが出來上りはすまいかと考へた。

飽和
(Sepia)

余はまだ眺めて居る。セピア色の水分を以て飽和した空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が、我が心の裏から次第に消去ると同時に、眼前の塔影が、幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟の、寢足らぬ夢の尾を曳く様に感ぜられる。暫くすると、向岸から長い手を出して、余を引張るか、と怪しまれて來た。今まで佇立して身動もしなかつた余は、急に川を渡つて、塔に行きたくなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して、塔橋を渡りかけた。長い手はぐい／＼牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁力は、現世に浮游する此の小鐵屑を吸収して了つた。門を入つて振返つた時、

一目散

(一)伊太利の詩人
ダンテ作の神曲
地獄篇中の句
呵責

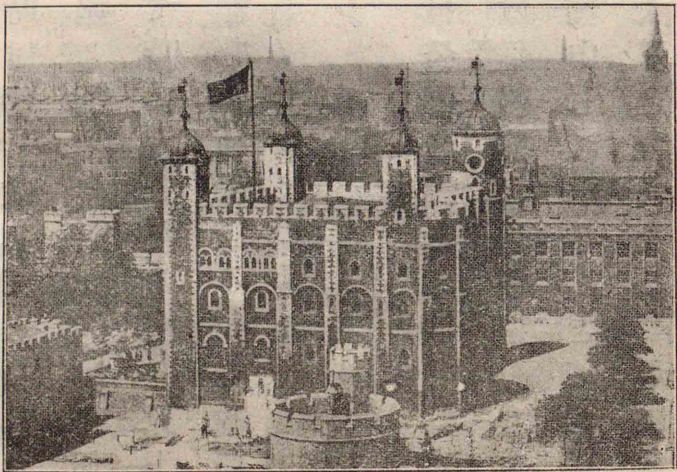
憂(一)の國に行かんとする者は此の門を潜れ。
永劫の呵責に遭はんとする者は此の門を潜れ。
迷惑の人と伍せんとする者は此の門を潜れ。
正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最上愛は吾を作
る。

常態を失ふ

我が前に物なし、只無窮あり。我は無窮に忍ぶものなり。
此の門を過ぎんとする者は一切の望を捨てよ。
といふ句がどこぞに刻んでは無いかと思つた。余は此の時
既に常態を失つて居る。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと、向ふに一つの塔
がある。是は圓形の石造で、石油タンク状をなして、恰も巨人
の門柱の如く、左右に屹立して居る。其の中間を連ねて居る

建物の下を潜つて、向ふへ抜ける。中塔とは此の事である。少
し行くと、左手に鐘塔が峙つて
ある。鐵の楯、黒鐵の甲が野を蔽
ふ。秋の陽炎の如く見えて、敵遠
くより寄すると知れば、塔上の
鐘を鳴す。星黒き夜壁上を歩む
哨兵の隙を見て逃れ出でる囚
人の、逆しまに落す松明の影か
ら闇に消える時も、塔上の鐘を
鳴す。心傲つた市民が、君の政非
なりとて、蟻の如く塔下に押寄
せて、犇めき騒ぐ時も、亦塔上の鐘を鳴す。塔の上の鐘は事あ



倫敦塔

無二に鳴し
無三に鳴す

れば必ず鳴す。或時は無二に鳴し、或時は無三に鳴す。祖來る時は祖を殺しても鳴し、佛來る時は佛を殺しても鳴した。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍と無く鳴した鐘は、今何處へ行つたのやら、余が頭をあげて、蔦に古りたる櫓を見上げた時は、寂然として既に百年の響を収めて居る。——濛虛集——

一一一 光賴參内

(一)平治元年十二月十九日
僉議
(二)藤原顯頼の子。權大納言正二位。み、桂大納言といふ。承安四年(一一八三)薨。年五十三。
(三)藤原信賴。光賴の甥なり。

さる程に内裏には、同じ十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光賴卿、此の程は信賴卿の舉動過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、殊に鮮に東帶引きつくるひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傳子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束にい

雑色

でたたせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光賴が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、其の外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて所々門々を固く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

上臈

紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信賴卿一座して、其の座の上臈たち皆下にぞ着かれたる。光賴卿、こは不思議の事かな。人はいかにふるまふとも、かれは右衛門督、我は左衛門督なれば、下には着くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしけるに、今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ。と色代して、しづくと歩み、信賴卿の上にむずと着き給ふ。光賴卿は信賴卿の爲に

(一)藤原顯長の子。從二位。權大納言に至る。
宰相
しどけなう
色代

氣色して

は母方の舅きやうなる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなさましと見給ふに、光頼卿した下襲の裾引直し、衣紋つくるひ、笏取直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて參内する所なり。抑、何事の御誼ぞ。」と問ひけれども、信頼物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、惡しう參つて候ひけり。とて、しづくと歩み出でられけり。

惡しう

大剛の人

庭上に充滿ちたる兵どもこれを見奉りて、あはれ此の殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつ

(一)源満仲の子。大江山の山賊退治を以て顯る。
(二)頼光の弟。平忠常の亂を平

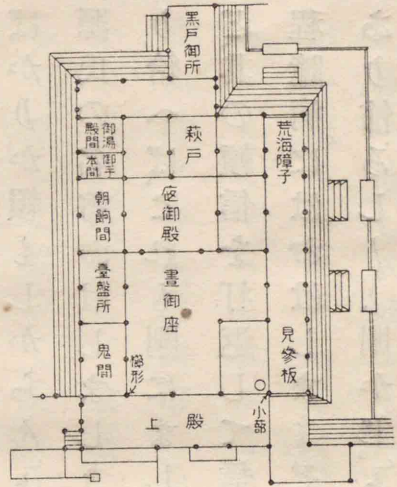
壁に耳天に

(三)藤原惟方。檢非違使別當なり。

れども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、此の人を大將として合戦せば、いかにばかりか頼もしからん。と申せば、傍なる者、昔頼光(一)、頼信(二)とて源氏の名將おはしましき。其の頼光を打返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。と言へば、又傍より、なご、其の頼信を打返して信頼と付き給ふ。右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。と言へば、壁に耳、天に口といふ事あり。怖ろしく、聞かじ。と言ひながら、皆忍び笑に笑ひけり。光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小藪の前、見參の板高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當(三)惟方のおはし

有職

(一)藤原通憲入道
信西
(二)京都の事北



けるを招き寄せ、宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、参じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人数にてあなり。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人どもなり。其の中に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれることはいかに。以ての外、然るべからざるふるまひかな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。其の職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに耻辱なり。就中首實

天氣

曩祖
(一)勸修寺内大臣
高藤
(二)三條右大臣定方
高藤の子

さしもごか

檢は甚だ穩便ならず」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば」とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて、「こはいかに、勅詔なればとて、いかで存する旨を一議申さざるべき。吾等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣が延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣亦十一代、承り行ふことは皆是徳政なり、一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なうて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴悪の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信頼

時刻をや廻らすべき

相構へて

(一)二條天皇。

(二)後白河上皇。

内侍所

卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。又火などを懸けなば、君も争でか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、此の時に在るべきをや。右衛門督は御邊に大小事を申し合すところ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を伺ひ、玉體恙なくおはします様に思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽は何處に。夜の御殿に。と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又朝餉あさかじの方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と宣へば、それには右衛門督住み候へば、其の方様の女房

かげろふ
かくござん
なれ
参らせたなり

げのろくし

宿業

(一)支那古代の隱者。堯の天下を彼に譲らんとするや、之を聞き耳汚れたりとして、潁水に洗ふ。

などぞかげろひ候らん。と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今かくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し参らせたなり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法を如何守り給ひぬるぞ。異國には斯様の例ありと雖も、我が朝には未だ此の如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな。とて、のろくしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、吾いかなる宿業に依つて、かゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由(一)にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、袍フエのきぬの袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上

に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみては、打萎れてぞ出で給ひける。——平治物語——

一三 宣戰の詔勅 其の一

一 清國ニ對スル詔勅 (明治二十七年八月一日)

天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ、忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス。

百僚有司

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス。朕カ百僚有司ハ、宜ク朕カ意ヲ體シ、陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ、交戰ノ事ニ從ヒ、以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ。苟モ國際法ニ戾ラサル限リ、各權能ニ應シテ、一切ノ手段ヲ盡スニ於テ、必ス遺漏ナカラムコトヲ期セヨ。

事ヲ外國ニ構フ

惟フニ、朕カ即位以來、茲ニ二十有餘年、文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ、事ヲ外國ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信シ、有司ヲシテ常ニ友邦ノ誼ヲ篤クスルニ努力セシメ、幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フ。何ソ料ラム、清國ノ朝鮮事件ニ於ケル、我ニ對シテ着々隣交ニ戾リ、信義ヲ失スルノ舉ニ出テムトハ。

朝鮮ハ帝國カ其ノ始ニ啓誘シテ、列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ。而シテ清國ハ毎ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ、陰ニ陽ニ、其ノ内政ニ干涉シ、其ノ内亂アルニ於テ、口ヲ屬邦ノ拯難ニ籍リ、兵ヲ朝鮮ニ出シタリ。朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ、兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ、更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ、治安ヲ將來ニ保タシメ、以テ東洋全局ノ

辭柄
秕政ヲ釐革
ス

亡狀ヲ極ム

蒙晦ニ付ス

平和ヲ維持セムト欲シ、先ツ清國ニ告クルニ、協同事ニ從ハ
ムコトヲ以テシタルニ、清國ハ翻テ種々ノ辭柄ヲ設ケ、之ヲ
拒ミタリ。帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ秕政ヲ釐革
シ、内ハ治安ノ基ヲ堅クシ、外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコ
トヲ以テシタルニ、朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ、清國ハ終
始陰ニ居テ、百方其ノ目的ヲ妨碍シ、剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ、時
機ヲ緩ニシ、以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ、一旦成ルヲ告クル
ヤ、直ニ其ノ力ヲ以テ、其ノ欲望ヲ達セムトシ、更ニ大兵ヲ韓
土ニ派シ、我艦ヲ韓海ニ要撃シ、殆ト亡狀ヲ極メタリ。則チ清
國ノ計圖タル、明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラサ
ラシメ、帝國力率先シテ、之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル
朝鮮ノ位置ハ、之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ、

以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ、以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク
擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フヘカラス。孰、其ノ爲ス所
ニ就テ、深ク其ノ謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ、實ニ始メヨリ平
和ヲ犧牲トシテ、其ノ非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサル
ヘカラス。事既ニ茲ニ至ル、朕平和ト相終始シテ、以テ帝國ノ
光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖、亦公ニ戰ヲ宣セサル
ヲ得サルナリ。朕ハ汝有衆ノ忠實武勇ニ倚賴シ、速ニ平和ヲ
永遠ニ克復シ、以テ帝國ノ光榮ヲ完クセムコトヲ期ス。

一四 宣戰の詔勅 其の二

二 露國ニ對スル詔勅 (明治三十七年二月十日)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ、

忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス。朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス。朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク、朕カ百僚有司ハ宜ク各其ノ職務ニ率ヒ、其ノ權能ニ應シテ、國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ。凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ、一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ。

覺端ヲ開ク

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ、列國ト友誼ヲ篤クシテ、以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ、各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ、永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スベキ事態ヲ確立スルハ、朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ、且暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス。朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ、列國トノ關係年ヲ逐フテ益、親厚ニ赴クヲ見ル。今不幸ニシテ、露國ト覺端ヲ開クニ至ル。豈朕カ志ナラムヤ。

曠日彌久

折衝ヲ重ヌ

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ、一日ノ故ニ非ス。是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス、韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ。然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約、及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラヌ、依然滿洲ニ占據シ、益其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ、終ニ之ヲ併吞セムトス。若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セム乎、韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク、極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス。故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ、切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ、以テ平和ヲ恒久ニ維持セムコトヲ期シ、有司ヲシテ露國ニ提議シ、半歲ノ久シキニ互リテ、屢次折衝ヲ重ネシメタルモ、露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス。曠日彌久、徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ、陽

旗鼓ノ間ニ
求ム

ニ平和ヲ唱道シ、陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ、以テ我ヲ屈從セシメムトス。凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ。露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス、韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ、帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス。事既ニ茲ニ至ル、帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ、今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ。朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ、速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ、以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス。

三 獨逸國ニ對スル詔勅 (大正三年八月二十一日)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ、忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス。

朕茲ニ獨逸國ニ對シテ戰ヲ宣ス。朕カ陸海軍ハ宜ク力ヲ極メテ戰鬪ノ事ニ從フヘク、朕カ百僚有司ハ宜ク職務ニ率循シテ、軍國ノ目的ヲ達スルニ勗ムヘシ。凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ、一切ノ手段ヲ盡シ、必ス遺算ナカラムコトヲ期セヨ。

租借地

朕ハ深ク現時歐洲戰亂ノ殃禍ヲ憂ヒ、專ラ局外中立ヲ恪守シ、以テ東洋ノ平和ヲ保持スルヲ念トセリ。此ノ時ニ方リ、獨逸國ノ行動ハ遂ニ朕ノ同盟國タル大不列顛國ヲシテ戰端ヲ開クノ已ムナキニ至ラシメ、其ノ租借地タル膠州灣ニ於テモ、亦日夜戰備ヲ修メ、其ノ艦艇ヲ東亞ノ海洋ニ出沒シテ、帝國及與國ノ通商貿易、爲ニ威壓ヲ受ケ、極東ノ平和ハ正ニ危殆ニ瀕セリ。是ニ於テ朕ノ政府ト大不列顛國皇帝陛

措置

回牒

皇妣

平和ニ眷々
タリ

下ノ政府トハ、相互隔意ナキ協議ヲ遂ケ、兩國政府ハ同盟協
約ノ豫期セル全般ノ利益ヲ防護スルカ爲、必要ナル措置ヲ
執ルニ一致シタリ。朕ハ此ノ目的ヲ達セムトスルニ當リ、尙
努メテ平和ノ手段ヲ悉サムコトヲ欲シ、先ツ朕ノ政府ヲシ
テ、誠意ヲ以テ獨逸帝國政府ニ勸告スル所アラシメタリ。然
レトモ所定ノ期日ニ及フモ、朕ノ政府ハ終ニ其ノ應諾ノ回
牒ヲ得ルニ至ラス。

朕皇祚ヲ踐テ未タ幾クナラス。且今尙皇妣ノ喪ニ居レリ。
恒ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ、而カモ竟ニ戰ヲ宣スルノ
已ムヲ得サルニ至ル、朕深ク之ヲ憾トス。

朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ、速ニ平和ヲ克復シ、以テ
帝國ノ光榮ヲ宣揚セムコトヲ期ス。

一五 小鍛冶

シテ 稻荷明神
（前は童子、
後は狐）
ワキ 三條小鍛
冶宗近
ワキッレ 大臣
橋道成
（一）一條天皇の御
時京都三條に
住みし刀鍛
治。姓は橋。
信濃大掾た
り。

宣旨

道成詞、是は一條の院に仕へ奉る橋の道成にて候。さて今
夜帝不思議の御告ましますにより、三條の小鍛冶宗近を召
し、御劔を打たせらるべきとの勅詔にて候間、只今宗近が私
宅へと急ぎ候。如何に此の屋の内に宗近在るか。ワキ詞、宗近
とは誰にて渡り候ぞ。道成詞、是は一條の院の勅使にて有るぞ
とよ。さても帝、今夜不思議の御告ましますにより、宗近を召
し御劔を打たせらるべきとの勅詔なり。急いで仕り候へ。
ワキ詞、宣旨畏つて承り候。さやうの御劔を仕るべきには、我に
劣らぬ者相鎚を仕りてこそ、御劔も成就候べけれ。是はとか
くの御返事を申し兼ねたるばかりなり。道成詞、實に、汝が

領掌

御劔の刃の
亂るゝ心な
りけり

言語道斷

(一)京都伏見稻荷
明神

御入り

申す所は理なれども、帝不思議の御告ましませば、頼もしく
思ひつゝ、早々領掌申すべしと、謠重ねて宣旨ありければ、ツキ
謠此の上は、とにもかくにも宗近が、地謠とにもかくにも宗
近が、進退こゝに谷りて、御劔の刃の、亂るゝ心なりけり。さり
ながら御政道直なる今の御代なれば、若しも奇特の有りや
せん、そののみ頼む心かな。

ワキ詞 言語道斷、一大事を仰せ出されて候ものかな。かやう
の御事は神力を頼み申すならではと存じ候。某が氏の神は
稻荷の明神なれば、是より直に稻荷に参り、祈誓申さばやと
存じ候。

シテ詞 なるゝあれなるは三條の小鍛冶宗近にて御入り
候か。ワキ詞 不思議やな、なべてならざる御事の、我が名をさし

て宣ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞 雲の上なる帝よ
り、劔を打ちて参らせよと、汝に仰せ有りしよなう。ワキ詞 され
ばこそ、それにつきても、猶々不思議の御事かな。劔の勅も唯
今なるを、早くも知し召さるゝ事、返すゝも不審なり。シテ詞
「實にく、不審はさる事なれども、我のみ知ればよそ人まで
も、ワキ詞 天に聲あり、シテ詞 地に響く、地謠 壁に耳、岩の物いふ世
の中に、隠はあらし、殊に猶、雲の上人の御劔の、光は何か暗か
らん。唯頼め、此の君の恵によらば御劔も、などか心に適はざ
るべき。

ワキ詞 地謠 其れ漢王三尺の劔、居ながら秦の亂を治め、又煬帝
がけいの劔、周室の光を奪へり。シテ、サシ謠 其の後、^(三) 玄宗皇帝の
鍾馗大臣も、地謠 劔の徳に魂魄は、君邊に仕へ奉り、シテ謠 魍魎

(一)漢高祖三尺の
劔を提げて、兵
を起し、遂に
秦を滅す。周
(二)隋の煬帝、周
唐の玄宗の時
(三)鍾馗の亡霊あ
らはれて、悪鬼
を退治す。

(一)伊勢尾張の
あはひの海づ
らを行くに、
波のいと白く
立つを見て、
いとどしく過
ぎにし方の戀
しきにかへる
波かな。(伊
勢物語)
(二)支那の太古に
黄帝と蚩尤と
戦ひし所。

鬼神に至るまで、地謠、劔の刃の光に恐れて、其の寇をなす事
を得ず。シテ謠、漢家本朝に於て劔の威徳、地謠、申すに及ばぬ奇
特とかや。クセ、又我が朝の其の始め、人皇十二代景行天皇、御
子の尊の御名をば、日本武と申し、が、東夷を退治の勅を受
け、關の東も遙なる、東の旅の道すがら、伊勢(一)や尾張の海面に、
立つ波までも、歸る事よと羨み、いつか我も歸る波の、衣手に
あらめやと、思ひつゞけて行く程に、シテ謠、こゝやかしこの戰
に、地謠、人馬巖窟に身を碎き、血は涿鹿(二)の川となつて、紅波楯
流し、數度に及べる夷も、兜を脱いで矛を伏せ、皆降參を申し
けり。尊の御時より、御狩場を始め給へり。頃は神無月二十日
あまりの事なれば、四方の紅葉も冬枯の、遠山にかゝる薄雪
を、詠めさせ給ひしに、シテ謠、夷四方を圍みつゞ、地謠、枯野の草

失せてんげ
り

に火をかけ、餘焰しきりに燃上り、敵攻鼓を打ちかけて、火焰
をはなちてかゝりけれど、シテ謠、尊は劔を抜いて、地謠、あたり
を拂ひ、忽ちに焰も立退けと、四方の草を薙ぎはらはせたま
へば、劔の精靈嵐となつて、焰も草も吹返されて、天に輝き地
に満ち、て、猛火は却つて敵を焼けば、數萬騎の夷どもは、
忽ちこゝにて失せてんげり。其の後四海治りて、人家戸ざし
を忘れしも、其の草薙の故とかや。唯今汝が打つべき其の瑞
相の御劔も、いかでそれには劣るべき。傳ふる家の宗近よ、心
安く思ひて下向し給へ。

ワキ詞、漢家本朝に於て劔の威徳、時に取つての祝言なり。さ
てさて、御身は如何なる人ぞ。シテ詞、よし誰とても唯頼め、まづ
まづ勅の御劔を、打つべき壇を飾りつゞ、謠、其の時我を待ち

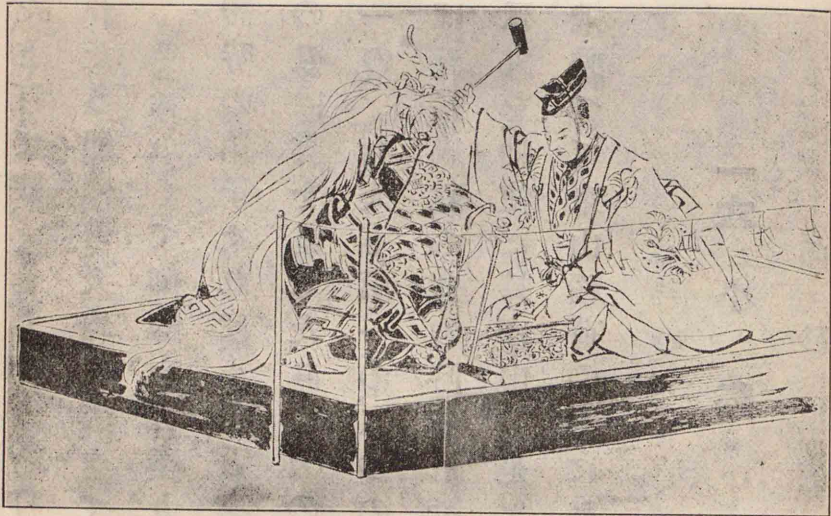
通力

給はゞ、地謠、通力の身を變じて、必ず其の時節に参りあひて、御力を附け申すべし、待ち給へと、夕雲の稻荷山、行方も知らず失せにけり。

ワキ謠、宗近勅に随つて、即ち壇に上りつゝ、不淨を隔つる七重の注連、四方に本尊をかけ奉り、幣帛を捧げ、仰ぎ願はくは、宗近の時に至つて人皇六十六代、一條の院の御宇に、其の職の譽を蒙る事、是私の力にあらず。伊弉諾、伊弉册の、天の浮橋を踏渡り、豊葦原を探り給ひし御矛より始れり。其の後南瞻僧伽陀國、波斯彌陀尊者より此のかた、天國(一)ひつぎの子孫に傳へて、今に至れり。願はくは、地謠、願はくは、宗近私の高名に非ず。普天率土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神、唯今の宗近に、力を合せてたび給へとて、幣帛を捧げつゝ、天に仰

(一)刀鍛冶諸流の
元祖。文武天皇
皇の大寶年中
大和國宇多郡
に住みきと傳

十方恒沙



ぎ頭を地につけ、骨髓の丹誠、聞入れ納受せしめ給へや。
ワキ謠、謹上再拜。
小 地謠、いかにや宗近、勅の劔、
鍛 いかにかや宗近、勅の劔、打つべ
治 き時節は虚空に知れり。頼め
や頼め唯頼め。シテ謠、童男壇の
上(樂 能)に上り、地謠、童男壇の上に
上つて、宗近に参拜の膝を屈
し、さて御劔の鐵(鐵)はと問へば、
宗近も恐悦の心を先として
鐵取りいだし、教の鎚をはつ

たと打てば、シテ謠ちやうと打つ。地謠ちやうくくと、打重
ねたる鎚の音、天地に響きて夥しや。

ワキ謠かくて御劔を打奉り、表に小鍛冶宗近と打つ。シテ詞、神
體時の弟子なれば、小狐と裏にあざやかに、地謠打奉る御劔
の、又は雲を亂したれば、天の叢雲とも是なれや。シテ謠、天下第
一の、地謠、天下第一の、二つの銘の御劔にて、四海を治め給へ
ば、五穀成就も此の時なれや。即ち汝が氏の神、稻荷の神體小
狐丸を、勅使に捧げ申し、是までなりと言捨て、又むら雲に
飛乗つて、東山稻荷の峯にぞ歸りける。——觀世流謠曲——

一六 小 謠

高 砂

(一)太平之世。五
日一風。十日
一雨。風不鳴
枝。雨不破
塊。王充論
衡。

(二)京都賀茂川に
橋かゝれる二

四海浪しづかにて、國も治る時つ風、枝をならさぬ御代な
れや。あひに相生の松こそめでたかりけれ。實にやあふぎて
もこともおろかや、かゝる代にすめる民とて、豊なる君の惠
ぞ有難き。

熊 野

(一) 四條五條の橋の上、老若男女、貴賤都鄙、いろめく花衣、袖を
つらねて行末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛、名
におふ春の景色かな。

鶴 龜

敷妙 庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃
の扉、碑礫のゆきげた瑠璃の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘
所ならず、君の惠ぞ有難き。

敷妙

(一)花さかばつ
げんといひし
山人の、來る
音すなり馬に
くらすおけに
(源頼政)

鞍馬天狗

花さかば、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、くら
まの山のうず櫻、手折るしをりをしるべにて、奥も迷はじ咲
きつゞく、木蔭に並みゐて、いざゞ花をながめん。

烏帽子折

かやうに祝ひつゝ、程無く烏帽子折立て、花やかに三
ろ組のゑぼし懸緒取出し、氣高く結ひすまし、召されて御覽
候へとて、おぐしの上に打置き、立退きて見れば、天晴御器量
や。これぞ弓矢の大將と申すとも、不足よもあらじ。

竹生島

緑樹影しづんで、魚木に上るけしきあり。月海上に浮んで
は、兎も浪を走るか、面白の島のけしきや。

(二)緑樹影沈魚
上レ木。清波月
落兎奔。浪。一
休、建長寺僧自
詩、竹生島

一七 舉國一致

日本國民は古來未だ曾て外國の侮を受けた事がない。古
くは元寇の役近世では日清日露の戦争、随分な大敵に逢つ
ても、舉國一致の精神で國難を免れて來た。一旦緩急ある時
に國民が團結する力は實にえらい事で、自己の利害を棄て
て、國家に盡す精神が、日本今日までの歴史を維持した所以
である。

併しながら、かやうな國民團結の力は、決して日本人ばか
りの特有では無い。今回の歐羅巴大戦争、否其の範圍の段々
廣まつた今日に於ては、世界を二つに分けた大戦争ともい
ふべき時勢に於ては、敵味方共に實に舉國一致の實を擧げ

て居る。老いも幼きも身分相應國家に盡す精神で働いて、勤儉を事として、萬の不自由を忍んで居る。其の精神は男も女も一つである。男子が争うて戦場に進めば、女子は残つて國を守らうといふ決心がある。露西亞では、一時女子さへ戦陣に立つといふ有様であつた。政府から出る命令を、國民は皆自己の大事として守り、誰一人不足をいふものの無かつたのは、政府からの命令では無く、自己の守るべき道と信じたからである。思ふにこれは今度の戦争の結果では無い。平素からの國民の自覺が、此の大戦亂について現れたのである。日本國民の最大缺點は度量の狭い事、他人の美を成し得ぬ事であらう。人を嫉み、人をそねむ根性が多くて、他人を信賴し得ぬのである。外國在住の日本人が互に嫉み合つて、同

漁夫の利

胞の鬩ぎ合を外國人にまでも見透かされ、却つて漁夫の利を占められる様な事例は珍しくは無い。かういふ有様では、世界の國家を相手としての生存競争はむづかしい。戦争の場合のみでなく、平時から國家の利害を第一にして、自己の利害を第二に置くの考が無ければならぬ。大國家の大國民であるといふ自覺が無ければならぬ。

日本人の度量の小さいのは、歴史的からも原因があらう。源平の民族的鬭争以來、近代各藩の競争なども、其の原因であらう。今の世は一層世界的の國民となる覺悟を以て、從來の狭量な心持を一變しなければならぬ。政治家も商工業家も、其の心でなくては、此の日本の國家を維持して行く譯には行かぬ。國民皆兵といふ事は、語を換へれば、老幼男女の舉

國一致といふことである。

一八 邦人の性情

姉崎正治

人誰か禍福の變轉に驚き、命運の變化を歎ぜざらん。福祉を得て歡び、不運に接して悲しむは人の常情のみ。然れども運命の怒濤に抗し、毅然として自己の位置を維持する事をなさず、徒らに外界の變轉極りなき境遇運命に翻弄せらるるが如きは、自己の天職と能力を知らざる者にして、自棄の甚だしき、之に過ぎたるは無かるべし。人類には自ら當に務むべき人生最高の究極目的と、又之に達すべき天賦の性能とのあるあり、拮据此の性能を活動せしめ、自ら立つの氣象なき者は人にあらざるなり。

運命に翻弄せらる

傳奇的

親昵

白面涅齒

我が日本民族、古來感情に富むを以て著し。感情の激する所往々なし難きの事を爲し、収め難きの功を収めたる事なきに非ず。我が國史の花は、一に民族の感情發動に成りしものなり。其の歴史の傳奇的に華麗にして、又美術的に情致あるは此が爲なり。最も感情的に熱血的なる我が民族は、又最も喜怒哀樂の變に富み、怒つては威嚴、十萬の醜虜を退けたる大將軍も、笑つては溫容、稚兒をも親昵せしめたり。山なす敵陣を望みて馬蹄の塵と睥睨したる關東の荒武者も、白面涅齒花の如き平家の公達を殺しては、悲歎の涙抑へ難く、黒谷の禪房に落飾して、一生を念佛に送りしにあらざや。發しては千峰の雲と見まがふ吉野の萬朶の櫻は、實に我が民族の粹なる武士の理想なりき。

比々皆然り
城を枕にす

然れども熱血的感情的なるは即ち外來の事物に感動し易きなり。運命の轉化に對して、最も喜び又悲しみ易きなり。此に於て最も感情に富む我が大和民族は、又最も運命に退讓し易き人民たるに至れり。之を最も觀易き例に見るも、一死君國に盡すの心に至りては、我が民族の最も他に向つて誇るべき所。而も一度意の如くならざらんか、君國の爲には千辛萬苦に耐へ、再舉其の目的を達せんとはせず、却つて櫻花の小夜嵐に吹散ると同じく、花々しく死して餘塵を止めざらんと力むるもの、比々皆然るに非ずや。戰一度利あるや、士氣跳躍百嶮を苦とせずして敵を鑿にせんとするも、事一度敗るゝや、死を決して一軍一族、城を枕にして自盡するを名譽とす。小楠公の四條畷に萬古の恨を殘したるも此が爲

受動的
活動的

のみ。鎌倉の故府が、游子をして當年の血痕を懷ひ、古を忍ぶべき幾多の遺蹟を傳ふるもこれが爲に非ずや。吾人は一概に此等武夫の花々しき最後を非難せんとするに非ず。しかも當年若し正行をして弟正儀の如く百難不撓事に當らしめば、南朝の行末は如何なりしかを思ひ、また尊氏をして弟直義に聽かずして徒らに自盡せしめば、足利氏の天下は如何に終りしかを思はば、感慨轉、深からざるを得ざるものあるなり。

熱情的なる大和民族は往々にして運命に翻弄せられ、泣きては笑ひ、喜びては悲しみ、受動的に運命の感動を受けて激發するも、活動的に毅然不屈外來の運命に反抗し、之と健闘し、以て此の強敵を壓倒せん事を知らず。順境に處しては

彼岸の光明

天神幸を吾に降すと謝するも、一度逆境に陥らば、曲神の災厄終に免るべからずと觀じ了らんとす。喜悲轉顛、順逆轉化の間に安立する所なく、随つて、豫言的の大希望を抱きて、浮世の波濤に對抗せんとせず、目前の禍福に目眩し、心激し、爲に高大永遠なる彼岸の光明を望んで勇進猛往するの氣象なし。是我が民族性上の一大缺點に非ずや。此の性情の爲に、我が國家が幾何の進運を害し、幾何の強度を損ずるかを思はば、國を憂ふる者の一日も默視する能はざる所なり。

—復活の曙光—

(一)鹿兒島灣の南方硫黃島。南(二)少將藤原成康と判官入道賴朝。

一九 有王島くだり 其の一
さる程に、鬼界が嶋の流人ども、二人は召還されて、都への

(一)僧都俊寛。法印寛雅の子。治承二年(一一八三)歿。年三十七。

此の瀬

ほりぬ。今一人残されて、憂かりし嶋の嶋守となりけるこそうたてけれ。僧都の稚くより不便にして召使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が嶋の流人ども、今日既に都に入ると聞えしかば、有王、鳥羽まで行向ひて見けれども、我が主は見え給はず。如何に。と問へば、それは尙罪深しとて、一人嶋に残されぬ。と聞きて、心憂しなども愚なり。常は六波羅邊に千みて聞きたりけれども、いつ赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍びておはしける所に参りて、此の瀬にも洩れさせ給ひて、御のほりも候はず。今は如何にもして、かの嶋へ渡りて、御行方を尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はりて、参り候はん。と申しければ、姫御前斜ならず悦び、やがて書きてぞ賜ひてける。暇を乞ふともよも許

さじとて、父にも母にも知らせず。唐船もつてしよらの纜は四月五月に解
くなれば、夏衣たつを遅くや思ひけん、彌生の末に都を立ち
て、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩瀉へぞ下りける。薩摩よりか
の鳴へ渡る船津にて、有王を人あやしめ、着たる物を剥取り
などしけれども、少しも後悔せず。姫御前の御文ばかりぞ、人
に見せじと、髻の中には隠しける。

さて商人船に乗りて、件の嶋に渡りて見るに、都にて幽か
に傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、
村もなし。自ら人あれども、言ふ詞をも聞知らず。有王嶋の者
に行向ひて、物申さん。といへば、何事。と答ふ。これに都より流
されさせ給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行
末や知りたる。と問ふに、法勝寺とも、執行とも知りたらばこ

執行

いざとよ

(一)山遠雲埋二行
客跡。松雲風
破。旅人夢。
(和漢朗詠集)
(紀齊名)
(二)沙頭刻。印鷗
遊處。水底摸
書雁度時。
(和漢朗詠集、
大江朝綱)

よろぼふ

そ返事はせめ。たゞ頭を振りて、知らぬ。といふ。其の中に或者
が心得て、いざとよ。さやうの人は三人こゝにありしが、二人
は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、あそこよこよ
と迷ひありきしが、其の後は行方をも知らず。とぞいひける。
山の方の覺束なさに、遙に分入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、
白雲迹を埋めて往來の道も定かならず。晴嵐夢を破りては
其の面影も見えざりけり。山にては竟に尋ねも遇はず。海の
邊につきて尋ぬるに、沙頭(一)に印を刻む鷗、沖の白洲にすたく
濱千鳥の外は、跡とふ者もなかりけり。或朝磯の方より、蜻蛉
などのごとくに瘦衰へたる者、よろぼひ出で來たり。もとは
法師にてありけりと覺えて、髪は空さまに生上り、萬の藻屑
取りつけて、荆棘かきぢを戴きたるが如し。繼目顯れて、皮ゆたひ、身

に着けたるは、絹布のわきも見えず。片手には荒海布を持ち、片手には魚を持ち、歩む様にはしけれども、はかもゆかず、よろよるとしてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。諸阿修羅等。故在大海邊。とて、修羅の三惡、四趣は深山大海の邊にありと、佛の説きおき給ひたれば、知らずわれ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。はや彼も此も、次第に歩み近づく。もしか様の者にてても、我が主の御行方や知りたると、物申さん。といへば、何事。と答ふ。これに都より流され給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかで忘れ給ふべきなれば、これこそそれよ。と宣ひもあへず、手に持てる物を投棄て、砂の上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が

主の御行方とは知りてけれ。

僧都やがて消入り給ふを、有王膝の上にかき載せ奉り、多くの波路を凌ぎつゝ、はるゝとこゝまで尋ね参りたるかひも無く、如何に憂きめをば見せんとはせさせ給ひ候ぞ。と、潜然とかき口説きければ、僧都少し人心地出で來、助け起され、誠に汝多くの波路を凌ぎつゝ、はるゝ。是迄参りたるこそ神妙なれ。只明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀しき者共の面影を、夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來れるをも、只夢とのみこそ覺ゆれ。もし此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせん。有王、之は現にて候なり。さても此の御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不

神妙
幻に立つ

思議には覺え候へ。」と申しければ、「いざとよ。これは、去年少將や判官入道が迎の時、其の瀬に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きし一言を、愚にもしやと頼みつゝ、ながらへんとはせしかども、此の嶋は人の食物も絶えて無き處なれば、身に力のありし程は、山に登りて硫黄といふ物を採り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず。かやうに日の長閑なる時は磯に出でて、網人、釣人に手をすり、膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ、荒海布を採り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日まではながらへたれ。さらでは憂き世を渡るよすがをば如何にかしつべき。これにては何事も語らひ難し。い

ざ我が家へ。」と宣へば、有王あの御有様にては家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け參らせ、教に隨ひて行く程に、松の一村ある中に、寄竹を柱とし、蘆を結びて桁梁に渡し、上にも下にも松の葉をひしと取懸けたれど、雨風溜るべくも見えず。有王あなあさまし。元は法勝寺の寺務職しむにて、八十餘箇所の庄務を掌り給ひしかば、棟門、平門の内に四百人の所従眷屬に圍繞せられておはせし人の、まのあたりかゝる憂目に遇はせ給ふ事の不思議さよと思ひける。

二〇 有王島くだり 其の二

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、去年少將や判官入道迎の時も、これらが文といふこともなし。今又汝が便に

(一)山城國愛宕郡。京都の北三里。

も、かくとも言はざりけりな。」と宣へば、有王涙に咽びうつぶして、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて起上り、涙を抑へて申しけるは、君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人参りて、資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隠しかねさせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、此の童ばかりこそ時々参りて御宮仕仕り候なり。いづれも御歎のおろかなるかたは候はねども、中にも稚き人はあまりに戀ひ参らせ給ひて、参り候度毎に、「如何に有王よ。われを鬼界が嶋とかやへ具して参れ。」と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、痘にて失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は其の御歎と申し、又此の御事と申し、一方ならぬ御物思に思し

召し沈ませ給ひて、打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしけれ。それより御文賜ひて参り候。」とて、取出で奉る。

僧都これを開きて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、などや、三人流されおはします人の、二人は召還されて候に、一人残されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、女の身ほど言ひがひなきことは候はず。男の身にて候はば、わたらせ給ふ嶋へも、などか尋ね参らで候べき。此の童を御伴にて、急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。これ見よ、有王よ。此の子が文の書様のはかなさよ。おのれを伴にて、急ぎ上れと書きたることのうらめしさよ。俊寛が心に

(一)人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな。
後撰集、藤原兼輔

(二)五月蟬聲送、
和漢朗詠集、李嘉祐

任せたる憂き身ならば、いかでか此の嶋にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になるとぞ覺ゆるが、これ程にはかなくては、いかで人にも見え、宮仕をもして身をも助くべき。とて、泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。此の嶋へ流されて後は、曆もなければ、月日の立つをも知らず。たゞ自ら花の散り、葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲、麥秋を送れば、夏と思ひ、雪の積るを冬と知り、白月、黒月の變り行くを見ては、三十日を辨ふ。指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるよ。西八條へ出でし時、此の子が行かんと慕ひしを、「やがて還らんぞ」と慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りとだにも思は

臨終正念

ましかば、今しばらくもなどか見ざらん。親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それは生身なれば、歎きながらも過さんずらん。さのみながらへて、おのれに憂目を見せんも、我が身ながらもつれなかるべし。とて、食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と申すに、僧都庵の中にて、遂にをはり給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

—平家物語—

一一一 奥の細道 其の一 松尾芭蕉

一首 途

(一)月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船

(一)天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。李太白春夜宴桃李園序

(一)元祿元年。

(二)磐城國白河郡古關村大字旗郡宿にあり。奥州の關門。

(三)江戸深川六間堀にありき。

の上に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取る物手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野、谷中の花の

(一)武藏國南足立郡。東京の東北口。

矢立

(二)武藏國北足立郡。奥州街道にあたる。

梢、またいつかはと心細し。睦じき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髪(一)の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなき頼の末をかけ、其の日漸く草加といふ宿(二)に辿り着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるもの先づ身を苦しむ。唯身すがらにといでたてるを、紙衣一具は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆の類、あるはさり難き錢などし

たるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわ
りなけれ。

二 白河の關

心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定
まりぬ。^(一)いかで都へと便求めしも理なり。中にも此の關は風
騷の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の
梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪
にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、
清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

曾良^(三)

とかくして越えゆくまゝに阿武隈川をわたる。左に會津
嶺高く、右に岩城、相馬、三春の莊、常陸、下野の地をさかひて、山

^(一)「たよりあら
ばいかで都へ
つげやらん、
今日白河の關
は越えぬと。」
盛(拾遺集、平兼
盛)

^(二)藤原清輔。二
條天皇の御代
の歌人。

^(三)芭蕉の門人。
河合曾良。旅
行の同伴者な
り。

^(四)磐城岩代を流
る、大河。

^(五)磐梯山のと。

^(六)磐城國石城
郡。

^(七)同相馬郡。

^(八)同田村郡。

^(一)岩代國岩瀬
郡。子石と須
賀川との間に
ある新田。

^(二)岩代國岩瀬
郡。

つらなるかげ沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影
うつらず、須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日止め
らる。先づ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦み、
身心疲れ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかば
かしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌。

二二 奥の細道 其の二

三 松島

船をかりて松島に渡る。其の間三里餘。雄島の磯に着く。
抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ
洞庭、西湖に耻ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の

事ふりにた
り
^(三)支那浙江省に
在り。一名錢
塘江。海潮の
奇を以て知ら
る。

潮を湛ふ。島々の數を盡して、欵つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑濃に、枝葉汐風に吹撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地續にて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見え、落穂、松笠など打煙りたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく佇む程に、月海に映りて晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寐す。

四 平泉

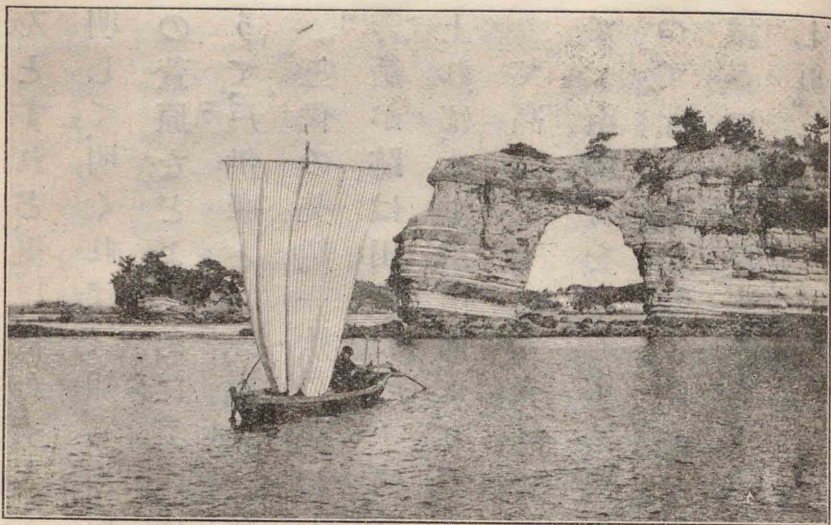
十三日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道、そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の卷といふ湊に出づ。黄金花咲く。と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立續きたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿から

(一)陸中國西磐井郡。北上川東を流る。

雉兔芻蕘

(二)陸前國牡鹿郡の町。

(三)「すめらぎの御代榮えんとあづまなる、みちのく山にこがね花さく。」(萬葉集)



松 島

(一)陸前國桃生郡橋浦村
 (二)同牡鹿郡稻生村の字
 (三)同上
 (四)陸前國登米郡沼田村、新田沼
 (五)同郡登米町
 (六)藤原清衡、基衡、秀衡
 (七)平泉館址、奥の御館
 (八)秀衡作れる平泉鎮の山に擬し、雄山に埋む
 (九)衣川館、義經の居館
 (一〇)泉三郎忠衡の居館
 (一一)叢功名一時の叢
 (一二)國破山河在、城春草木深、(杜甫)

んとすれど、更に宿かす人もなし。漸く貧しき小家に一夜を明して、明くれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の渡尾駁の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそ^(四)うて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。^(五)三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣選つて此の城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。と笠打敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳おどろかしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の屏風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新に圍はれ、藁を覆うて風雨を凌ぐ。暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

五 象 瀉

江山水陸の風光數を盡して、今象瀉に方寸を責む。酒田の湊より、東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の間十里、日影や、傾く頃、沙風眞砂を吹上げ、雨濛朧として、鳥海の山隠る。闇中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色亦

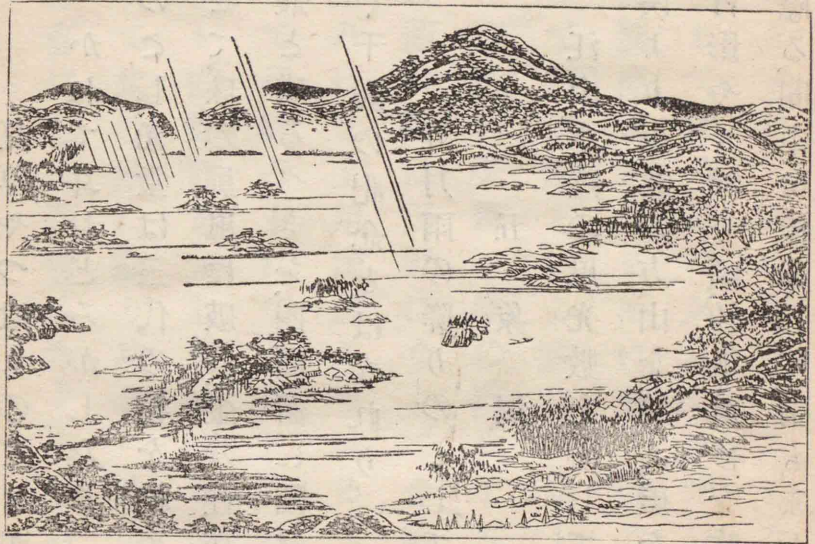
(一)藤原清衡建立。建武四年修理す。

(二)羽後國由利郡。鳥海山の西北麓。其の海岸は、其の後の文化元年、鳥海山の噴火によりて埋没せり。

(三)羽後國飽海郡の町。

闇中摸索

〔一〕きさかたの
櫻は波にうづ
もれて、花の
上こぐあまの
つり舟。〔西
行法師〕



象 湯 (芭蕉翁繪詞傳挿畫)

たのもしと、蟹の苫屋に膝
を容れて、雨の霽を待つ。
其の朝天よく晴れて、朝
日花やかにさし出づる程
に、象潟に舟を浮ぶ。先づ能
因島に舟をよせて、三年幽
居の跡をとぶらひ、向の岸
にあがれば、花の上漕ぐと
詠まれし櫻の老木、西行法
師の記念をのこす。寺を干
満珠寺といふ。此の寺の方
丈に坐して簾を捲けば、風

〔一〕陸前國名取
郡。陸羽にあり
關谷山。關谷山
國由利郡。吹浦
川より吹浦とも
いふ。

景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影うつりて
江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築きて、秋田
に通ふ道遙に、海北に構へて、浪打入るゝ處を汐越しといふ。
江の縦横一里ばかり、佛松島に通ひて又異なり。松島は笑ふ
が如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲みを加へて地勢魂
をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

—奥の細道—

一一三 蕉風の開眼

正岡子規

古池や蛙飛びこむ水の音

此の句は、芭蕉深川の草庵に住みし時の吟なりとかや。蛙
合の巻首に出で、春の目集中にも載せられたり。天下の人毫

も俳諧の何たるを知らざる者すら、猶古池の一句を誦せぬはなく、發句といへば、立ちどころに「古池」を想ひ起すが如き、實に此の一句程廣く知られたる詩歌は他にあらざるべし。而して、其の句の意義を問へば、俳人は則ち曰く、神秘あり、口に言ひがたし。といひ、俗人は則ち曰く、到底解すべからず。といひ、而して近時西洋流の學者は則ち曰く、古池波平かに一蛙躍つて水に入るの音を聞く。句面一閑靜の字を着けずして、閑靜の意言外に溢る。四隣閑寂として車馬の紛擾、人語、履聲の喧囂に遠きを知るべし。これ美辭學に所謂筆を省きて感情を強くするの法に叶へり。と果して神秘あるか、我之を知らず。果して解すべからざるか、我之を信ぜず。かの西洋學者の言ふ所稍庶幾からんか、然れども、未だ此の句の意を盡

(一) 松永貞徳。
(二) 貞徳の門流。
(三) 江戸初期芭蕉以前に流行せし輕妙なる俳風。西川宗因これを創む。

下圖芭蕉門の高弟(所謂十哲)を畫かく、上より文章、桃隣、園女、杉風、正秀、許六、支考、嵐雪、去來、其角なり。

さる所あり。芭蕉獨り深川の草庵に在り、靜に世上流行の俳諧を思ふ。連歌陳腐に屬して、貞徳俳諧を興し、貞門亦陳腐に屬して、檀林更に新意匠を加ふ。されど檀林も亦一時の流行にして、萬古不易のものに非ず。是に於てか、俳運亦一變し



(筆山華邊渡) 哲十門蕉
(藏氏冷竹田角)

て長句法を用ひ、漢語を雜へ、漸くにして貞門の洒落(地口)檀林の滑稽諧謔を脱せり。我が門弟等盛に之を唱道し、我亦時に此の流の俳句を爲すと雖も、奇に過ぐるものは再三再四するに及んで、忽ち厭倦を生ずるの習、我亦此の體を厭ふこ

舊套を襲ふ

佶屈聱牙

と漸く甚だしきに至れり。さりとして檀林の俗に歸るべくもあらねば、まして貞門の乳臭を學び、連歌の舊套を襲ふべしとも覺えず。何がな一體を創めて我が心を安うせんと思ふに、第一に彼の佶屈聱牙なる漢語を減じて、成るべくやさしき國語を用ふべきなり。而して其の國語は、響長くして意味少き故に、十七文字中に十分我が所思を現さんとせば、爲し得るだけ無用の言語と無用の事物とを省略せざるべからず。さて、かやうにして作り得る句は、如何なるべきかなどつくづく思ひめぐらせる程に、腦中濛々大霧の起りたらんが如き心地に、芭蕉は只惘然として坐りたるまゝ、眠るにもあらず覺むるにもあらず、萬籟寂として妄想全く絶ゆる其の瞬間、窓外の古池に躍蛙の音あり、自ら眩くともなく、人の語

破顔

大悟徹底

るともなく、蛙飛びこむ水の音」といふ一句は、芭蕉の耳に響きたり。芭蕉は始めて夢の醒めたるが如く、考に傾けし首をもたげ上ぐる時、覺えず破顔微笑を漏しぬ。

以上は、我が憶測する所なるを以て、實際は此の如くならざりしやも計り難けれども、芭蕉の思想が變遷せる順序は、此の外に出でずと思はる。其の蕉風(俗に正風といふ)を起せしも、實は此の時に在りしなり。或はいふ、此の句は芭蕉が禪學の上に工夫を開き、大悟徹底せし時の作なり」と。此の事甚だ疑ふべしと雖も、此の説を爲す所以のもの亦偶然にあらず。蓋し其の俳諧の上に於て始めて眼を開きたると、禪學の上に於て始めて眼を開きたると、其の趣相似たり。參禪は諸縁を放捨し、萬事を休息し、善惡を思はず、是非に管する莫く、

心意識の運轉を停む。蕉風の俳諧も亦此の意に外ならず。妄想を絶ち、名利を斥け、可否に關せず、巧拙を顧ず、心を虚にし、懷を平かにし、佳句を得んと執着すること無くして、始めて佳句を得べし。古池の一句は此の如くして得たる第一句にして、恰も參禪日あり、雀はちうく、鴉はかあく、柳は綠花は紅といふもの禪家の眞理にして、却つて蕉風の骨髓なり。「古池や」の句は實に其のまゝを詠ぜり、否ありのまゝが句となりたるならん。

— 獅祭書屋俳話 —

二四 今様五題

萬劫年ふる

萬劫年ふる

萬劫年ふる龜山の

下は泉の深ければ、

苔むす岩屋に松生ひて、
梢に鶴こそ遊ぶなれ。

松の木陰

松の木陰に立ちよれば、
梅が枝かざしにさしつれば、
春の雪こそふりかゝれ。

舊き都

後徳大寺實定

舊き都を來て見れば、
浅茅が原とぞなりにける。

月の光はくまなくて、
秋風のみぞ身にはしむ。

一天四海

治り靡く時なれや、
一天四海のうちのみか、

人の國まで日の本の、
唐土が原も此のところ。

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる、
萬歳千秋かさなれり。

一、藤原實定。歌人。世に後徳大寺左大臣と稱す。建久二年(一一九一)八月十四日歿。年五十四。

松の枝には鶴巢くひ、

巖のそばには龜遊ぶ。

二五 頼山陽 其の一

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭其の盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては戰國の餘習已に脱して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝其の秀を鍾め、其の華を競ひたれども、我が近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若し此の時に方り、一世の偉才を生じて、我が文學を振ふものあらんか、其の風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は獎勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として

輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は、必ず三四十年前に來りしならん。

つらく、各國文運の振興を考ふるに、其の先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、其の衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チヨ一サー、^(一)スペンサー、^(二)ミルトン、^(三)シエクスピヤの英文學に於ける、^(四)コルネイユ、^(五)モリエール、^(六)ラシーヌの佛文學に於ける、^(七)ゲーテ、^(八)シルレル、^(九)レツシングの獨逸文學に於ける、^(一〇)ダンテ、^(一一)ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ち我が文學を振へる張本も、亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵、景樹二翁を得、近體詩家に於て近松、^(一二)竹田二叟を得たれども、出づるに或は其の時を得ず、學或は其の道に適せず、才或は其の志に合はず。こゝを以て其

文藝の圃
(一)Chaucer (西曆一三四〇)
(二)Spenser (西曆一五五二)
(三)Milton (西曆一六〇八)
(四)Shakespeare (西曆一五六一)
(五)Cornelle (西曆一六〇五)
(六)Moliere (西曆一六七三)
(七)Racine (西曆一六三九)
(八)Goethe (西曆一七四九)
(九)Schiller (西曆一七五九)
(一〇)Lessing (西曆一七二九)
(一一)Dante (西曆一二六五)
(一二)Petrarca (西曆一三三〇)
(一三)竹田出雲。

積衰を振ふ
權度を得

の勢力の及ぶところ限極せられて、未だ文學の全般に向つて其の積衰を振ふこと能はざりしを見る。余はかの諸家の外に於て、其の才學よく權度を得て、恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いて其の用處を誤りたるがために、日本文學の泰斗たる名譽を得損ひ、徒らに史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、萬能達して一心足らず。といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾て其の人と其の才とを痛惜せずんばあらず。余は今日、世人が猶其の人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずと雖も、退いて之を再考すれば、更に深く惜しむ所なかるべからず。其の人を誰とかする。山陽頼氏是なり。

萬能達して
一心足らず

夙成
柴野栗山。

北馬南船

遊展

畛域

「詩は別才なり。」といひ、詩人は生る、成るにあらず。といふは東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、其の性格といひ、其の言行といひ、其の著作といひ、一として詩ならざるなし。其の童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。其の父母を懷ふに厚く、其の王室を懷ふに厚く、其の忠臣義士を懷ふに厚く、天下國家を懷ふに厚く、情に熱する所常に理の冷なるに勝ちたるは詩なり。其の北馬南船、行李卸さるる所なく、春花秋月、遊展遍からざる所なきは詩なり。其の畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格、言行、誰か之を詩に非ずといはん。試に其の著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ、其の議論は平凡のみ。其の事

天馬空を行

實は謬誤のみ。其の體裁は偏失のみ。然れども其の筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。叙事或は精、或は疎、或は長、或は短、精にして長なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫻々の餘韻を存す。争戦を叙すれば、讀者をして汗を握らしめ、別離を叙すれば、讀者をして涙に咽ばしむ。而して其の叙論の如き、俯仰低徊、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。其の題目を擇ぶに源平以後の争戦記を採りたるが如き、其の事實に於ては、博引旁搜と明證確説とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、専ら其の文章の靈動して、讀者をして感激せしめんとしたる

淋漓

博引旁搜

市糴



山陽

が如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を立つる標準一定ならずして、其の體裁の前後の矛盾を來せるを顧ざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の叙事詩たるのみ。

試に其の論策、文章を視よ。民政といひ、市糴といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして、實用に施すべからざるもの、比々として皆是なれども、其の

大聲放語

小品の文字

熱情の溢れたる、其の文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きて其の精華を、求むるに、其の寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字

にあり。其の形體は即ち論策たり、文章たり。其の本質は即ち想像のみ、詩詞のみ。

歌行
樂府

去りて其の詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、適麗なるものあり、輕妙なるものあり。而して其の最長を見るは歌行にあり、樂府にあり。料を史傳にとりて之を詩詞に寓したるものあり。山陽亦自ら以て得意とし、余不欲詠物。詠物不若詠史。史中有無數好題目。隨讀淺深皆可成眞詩。舍之而曰雁字鶯梭無爲也。とは其の平常の持論なりき。亦以て其の才の日本文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗て其の戯に作れる今様を讀み、其の跌宕飄逸、自ら不群の趣あるに服し、思へらく、此の詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり、もし馳驟縱橫、奇想を天外に飛ばし、其の事實に拘泥する

跌宕飄逸

馳驟縱橫

(一) 明の詩人。

(二) 清の詩人。

ことなく、演義述作する所あらしめば、其の造詣何ぞ唯李北海(一)、嚴海珊にして止まんや。我が史傳は未だ多く題詠に入らず、潜心好案を求め、研精妙句を探り、其の外史に灑きたる心血を傾倒して之を詩賦に注がんか、儼然たる叙事詩を作りて、我が文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して、固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて、専ら精力を詩に用ひざりしこと。

二六 賴山陽 其の二

余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜しむ理由頗る多し。今且く之を擧げんか。詩は別才なり、而して詩才敏妙、其の天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求

常套

しと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦其の常套を襲ふを免れず。つら／＼山陽の才幹を窺ふに、政治吏務は其の長ずる所にあらざりしが如し。即ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はゞ、其の成功何ぞ今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の氣象を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ斯の大功を奏するを得ん。と。嗚呼これ詩を知らざる者の言のみ。詩の人心を感發するは、其の勢力遙に散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはゞ、外史中の事實を敷衍して、之を詩にせるもの、亦豈其の遠因となる能はざらんや。且

完璧

上乘

(柴野栗山)

時流を脱せず

外史の如きは、其の文章如何に靈妙なりとも、今日の史學より之を視れば、小説と實録との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉んぞ初より純然たる詩篇たるの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに歎賞し、實材たらしむべし、詞人たらしむべからず。とて山陽の父春水に勧めて、史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脱せずといへども、其の史を學ばしめたるは大いに可なり。其の遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽の爲に再四歎惜する所なり。——今世名家文鈔——

芭蕉翁の臨終

自讀文

一 芭蕉翁の臨終

十月九日 諸子の取りはからひにて、ふるき衣裳又は夜具などの垢つきたる、不淨なるをよき衣に召更へさせまゐらす。師曰く、われ邊地波濤のほとりに草を敷き、石を枕として終るべき身のかゝる美しき褥の上に、しかも未來までの友ごち賑々しく鬼録に上らんこと受生の本望なり。昨夜目のあはざるまゝに、計らず案じ入りて吞舟(四)にかゝせたる、各詠じたまへ。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

『枯野をめぐる夢心。』ともし侍り、いづれなるべき。これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の心なり。併しかゝる生死の一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし一風流とはいへ、これも妄執(五)の一つともいふべけん。

(一)元祿七年(二三五四)芭蕉郷里伊賀の歸途奈良より大坂に至り花屋仁右衛門方の別宅で病に罹つた。
 (二)諸弟子達。
 (三)芭蕉邊地田舎。
 (四)鬼録に上る死ぬこと。鬼籍に上るといふに同じ。
 (五)芭蕉の弟子。いづれなるべき句の末をどちらかにきめよう妄執。

(一)向井去來。
河魚の患。
腹中の病。
風神の名章
何となく心に
感じた名文。

(一)去來いふ、さにあらず。日々朝雲暮雨の間もおかず、山水野鳥の上も捨て給はず。心身風雅ならざるなく、かゝる河魚の患につかれ給ひながら、今はのかぎりに其の風神の名章を唱へ給ふ事、諸門葉のよろこび、他門の聞末代の龜鑑なり。と、涕すゝり涙を流す。眼あるものこれを見れば魂を飛ばさんのみ耳ある者これを聞かば毛髪これがために動かん。列座の面々感慨悲想し、慟絶して聲なし。これ師翁一代遺教經なり。此の日より殊更に衰へたまへり。泄瀉せつしゃ度數知れず。去來記

(二)芭蕉の弟子。
醫師。

申の下一刻
午後六時。
(三)廣瀬氏。惟然
坊といふ。
(四)武藏。
(五)寶井其角。

十日 初時雨せり。師夜の明方より泄瀉度數知れず、ひとしほ惱み給へり。木節(二)此の日芍薬湯を盛る。諸子打寄り食事をすゝめまゐらせけれど、すゝみ給はず。梨の實を望み給ふ。木節堅く制しけれど、頻りに望み給ふゆゑ、止む事を得ずすゝめければ、一片味ひて止み給ふ。木節いふ、胃受くる所なし、死期近き(三)あり。と。申の下一刻(四)に至つて人心地つきたまふ。今日は一人も食したるものなし。惟然記(五)
十一日 朝またく時雨す。おもひがけなく東武(四)の其角來る。これは東武

(一)内藤丈草。
(二)各務支考。東
花坊といふ。
伽
看護。

(三)水田正秀。芭
蕉の弟子。

の誰彼同伴にて參宮の序、和州紀州を打ちめぐり、泉州より浪華に入りしが、はからずも師の勞(一)りおはすと聞付け、其處此處と尋ね廻り、漸うに驅付けたるなり。すぐに病床にまゐりて皮骨連立し給ふ體を見まゐらせ、且愁へ且喜ぶ。師も見やりたまひたるまでにて、唯々涙ぐみ給ふ。其角も言句(二)なくさしうつむき居たりしを、丈草(一)、去來(二)支考其の外の衆、次の間に招き、御病症の始終を物がたる。此の夜夜すがら伽して、思ひよりし事ども物語り居たるに、うしろより師夢の覺めたる如く粥を望み給ふ。人々嬉しさ限りなく、次郎兵衛取計らひて、疾く焚きあげすゝめまゐらす。快く召されけり。朔日より以來の食事なり。土鍋に残りたるを、去來椀にうつし入れて押戴き、
病中のあまりすゝりて冬ごもり
去來
去來いふ、趣向は他にもごめず、ありあふこと口ずさみて師を慰めまゐらせん。深く案じ入らず、頓に句作りたまへ。と。惟然(三)は前夜正秀と二人にて、一つの蒲團をひつ張りて被りしに、彼方へ引き、こなたへ引きて終夜寐入らず。はてはしらくと夜明けけるにぞ、其の事を互に笑ひあひて、

ひつ張りて蒲團に寒きわらひ哉 惟然
 一座これを聞きて、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひたまへり。人々嬉しき限りなく、十日以來の興にぞありける。初時雨なりければ、空とく晴れて日影さしいりたるに、蠅多く日南ひなたに群り居たり。人々藪ももてさし取るに、上手下手あるを見給ひて、暫く興に入り給ひけれど、大病中の事なれば、忽ち倦み給ひ、直ちに寢所に入り給ふ。

鬮とりて菜飯たゝかす夜寒かな

木節

うづくまる薬くすりのもとの寒さかな

丈草

一々惟然吟聲しければ、師丈草が句を今一度と望み給ひて、丈草出かされたり。いつ聞きてもさびしをり調ひたり。面白し。としはがれし聲もて譽め給ひにけり。いつにかはりし機嫌の麗しきを喜びけるに、木節一人愁をいだける體に見えければ、其角其の故を問ふ。木節いふ、大病中絶食なるに、俄に食のすゝむことあるは悪病なり、死期遠きにあらず。とさはしらす、各さゝめきゐたるに、夜半頃より又寒熱往來ありて、夜あけ頃より顔色土の如くに見

さびしをり、
 閑寂幽玄の
 味。蕉門にて
 俳諧の風趣を
 いふことば。

(一) 覆並氏。芭蕉の弟子。

咫尺す傍へ寄る。

湯をひかす沐浴ゆよくさす。

(二) 芭蕉の弟子。智月尼の子。

痰喘たんぜん 咳く度に痰ののどにつまること
 (三) 八十村氏。芭蕉の弟子。

(四) 法華經第二十品觀世音菩薩普門品。

え給ひ、暫くは悶亂し、人をも見知り給はざりしが、やゝあつて又正氣になり給ひ、左右に舍羅吞舟(一)、うしろよりは次郎兵衛抱きまゐらせて介抱し、程なく夜あくれば十二日なり。かねては閉籠り給ひしが、隔の障子も襖もとりはなさせ、其角、去來、丈草をこれへと向ふに見給ひ、穢けがを憚れば咫尺し給ふな。とことわり、行水を望み給ふ。木節頻りに制しけれど、頻りに望み給ふゆゑ、止むことを得ず湯をひかせまゐらせけり。座を靜にあらため、木節が醫術を盡されし事など謝し給ひ、さて三人の者を近く召され、乙州正秀(二)を左右にし、支考、惟然に筆をもらせ、亡きあとの事こまかく遺言したまふ。病苦すこしも見え給はず。人々奇異の思をなす。伊賀への遺書は手づから認め給ひ、外に京、江戸、美濃、尾張と洩れざる様に遺言し終り給ふに、始終は門人中にて筆記す。次第に聲細り、痰喘(三)にて惱み給ひければ、次郎兵衛素湯(四)にて口を潤しまゐらす。稍あつて去來に向ひ給ひ、路通(三)が數年の薪水の勞、ゆめゆめ忘れ置かず。われ亡きあとにはおよそに見捨て給はず。風流の交し給へ。此の事頼み置きはべり。諸國にも傳へ給はれかし。といひ終り給ひて餘言なく、合掌正しく、觀音經(四)と

屬續につく
いのちをは
る。

(一)馬琴七十五
歳。
葉月
陰曆八月。

髻歳。
幼年。

(二)馬琴二十四
歳。
(三)戯作の書入草
双子、廿日餘
五十兩書用而
二分狂言。
物の本。
小説本。

(四)馬琴三十八九
歳より五十歳
餘。
五午後十時。

聞えてかすかに聞え、息の通ひも遠くなり、申の刻過ぎて埋火の暖のさむる
が如く、次郎兵衛が抱きまゐらせたるによりかゝりて、寐入り給ひぬと思ふ
程に、正念にして終に屬續につき給ひけり。時に元祿七甲戌十月十二日申の
中刻、御年五十一歳なり。(支考記)

——花屋日記——

二 著作の苦心

瀧澤馬琴

今茲天保十二年辛丑の秋葉月まで、星霜二十八年にて、八犬傳稿本思の儘
に全局を結ぶ。

われ髻歳の時よりして、書讀むことを好みしかば、人と成るに及びては、一
日も書卷を把らざるることなし。かくて寛政二年の冬、初めて戯墨の繪草紙二
卷を編みてより、今に至りて五十二年、刊行の雜書物の本共に二百九十餘筆
に及べり。

此の他刊布せざる筆記、雜纂數へ盡すべうもあらず。就中文化の頃は日毎
に夙におき出でて机にむかひつゝ、其の夜亥の時まで稿本を綴りて、人の爲

瞑眩
目がくらむ。

晤譚
對談。

九石の弓
強弓。

(一)天保四年。馬
琴六十七歳。
(二)馬琴の子興
繼。琴緒と號
し醫を業とし
た。

に疲を厭はず。亥の時過ぎては睡氣づくまで書を読み、自らの樂みにす。若
し佳境に入る時は夜の明くるを覺えず。隣鶏の鳴くに驚かされて、やがてお
き出でて、又机に向ふ日もありけり。かくて年頃を経ぬるまゝに、逆上口痛の
患起りしより、年五十に至りては、齒は皆年々に脱けて一枚もあらずなりぬ。
且夜枕に就く時、仰ぎ臥せば瞑眩して堪へられず、横に臥せばさもなかりき。
此の頃一名醫と晤譚の折、此の事を告げしかば、名醫驚きて、足下生來血氣人
に勝れたれども、人の氣根は限りあり。九石の弓も毎に緊しく張りて弛めざ
れば、其の弦斷れざるを得ず。其の樂しむ所をもて、名利の爲に殉するは賢者
のせざる所なり。今より少し緩めよ。といはれし由の理なれば、これより夜學
せず、夜は亥の時を限りにして早く枕に就きしかば、漸々に安く覺えて、仰ぎ
臥しても瞑眩せず、ひたすら養生をむねとしける程に、わが還曆の年大病に
罹りて、命危かりしも幸にして瘥りにき。

とかくする程に癸巳の秋八九月の頃にやありけん、或朝ふと起出でける
に、右の一眼見ることを得ず。打驚き且訝りて故兒に示すに、瞳子の上の方流

二 著作の苦心

流行目
傳染性の眼
病。

れたり。療治なさるべし。といひけり。其の後親族朋友治療を勧むる者多かりしかど、われ敢へて従はず。且思へらく、われは幼きより眼の患なく、流行目だにも病みしことあらず。さるを今一朝に右の目を失ひしは、年來讀書筆硯の疲なるべく、且冬春毎に高き火桶を座右におきて、机邊の寒さを防ぐこと既に久しくなりしかば、其の火氣何時となく右の目に入りて乾かされたるにぞあらんずらん。譬へば老樹の片枝枯れたるに異ならず。よしや醫療に手を盡すとも、草根木皮のよく及ぶべきにあらずと思案して、一日も筆硯を排斥せず。初は硯の中見えかねて、筆を染むるに不便なりしに、それも慣れては不便にも思はず。其の後故兒の憂にあたりし年も、世渡りなれば忌ごもはて、は、又筆を把らざることを得ず。其のつぎの年四谷へ移徙しても、左の目は異なることもなければ、著篇は尙年月に綴りぬる程に、戊戌の春の頃より何となく左の目も亦翳むやうなりしに、夏に至りては愈、其の異なるを覺えしかども尙悟らず、こは眼鏡の曇りたる故ならんと謬り思ひて、世に本玉とかいふ水晶製の眼鏡の價貴きを厭はで、これかれと多く購ひ求めて、掛替へく

(一)天保六年父に先だつて歿。

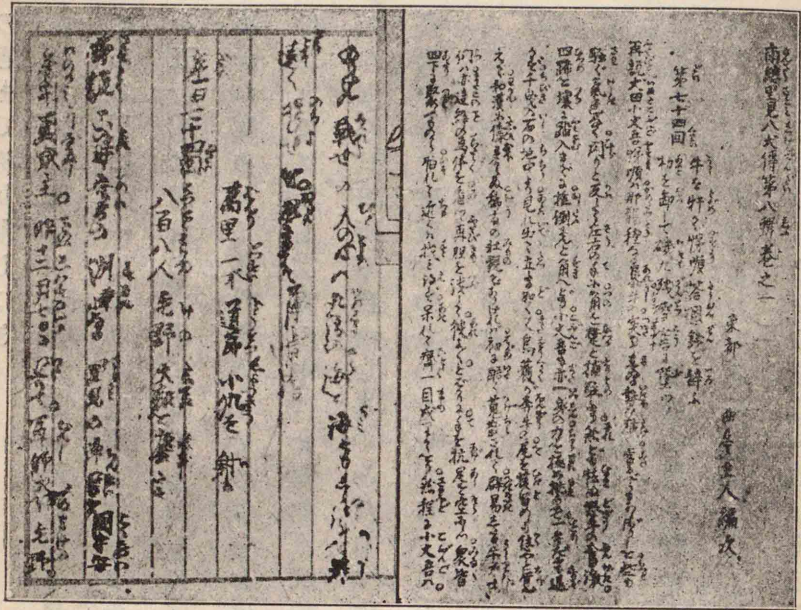
(二)天保九年。

(一)天保十年。

(二)天保十一年。

(三)天保十一年。

九月。



(健全時代) 馬琴自筆犬傳草稿 (兩眼失明前)

凌ぐものから、己亥の春に至りては愈、翳みて、病眼なるを知りながら、本傳いまだ大團圓に至らねば書肆の需を否みも得ず、なほ辛うじて綴るもの此の外にもありけり。かくて去歲の春までは、本傳の稿本も故の如く十一行の細字にもせしかども、夏に至りては只朦々朧々として細字を書くこと得ならねば、其の稿本を五行の大字にしつ。それも手撈りにて去年の秋長月、本傳第九輯四十五

の巻まで綴り果しにき。

かくては明年四十六の巻以下を綴り果さん事心もとなし。いでや尙かく
てある程に、今一卷なりとも綴らばやと愚心を勵まして第九輯百七十七回
を、五行或は四行の大字にもしぬるに、字の形もしごろもごろにて、且墨の
續かぬ處ありてよみ難しといへば、そを宅眷に補はせなごしぬる程に、霜月
に至りては、宛ら雲霧の中に在る如く、又朧月夜に似て、一字も書く事得なら
ずなりぬ。只筆研不自由なるのみならず、書畫を見てもしかと見えす、纔かに
晝夜を辨じ、東西を知るのみ。いかにもせん術なければ、机を退け筆を投捨
てて、獨り歎息の餘りに、

ながらふるかひこそなけれ見えすなりし

書卷川(一)ふみまがはになほわたる世は

さうち詠じて、爐に寄りてのみ居る程に、人々うれはしく思はぬはなく、爲に
代寫すべき人をたづぬるに、心になふ然る者のあるべくもあらず。われも
また盲ひては生きがひもなければ、此の年の秋長月よりつぎの年まで、人の

(一)下總國といひ
又常陸國とい
ふ。
書卷川になほわ
たる
其卷の著作で
渡世する。

霜月
十一月。

薦むる醫師を三名までかへたれども、未だちとも驗あらず。

されば今茲の春に至りてわれ又思ふに、八犬傳は今昔あり難き大部の物
の本なるに、始ありて終なくば、たゞ看官の飽かす思はんのみならず、残り惜
しくこそあらんすらめ。人の爲に謨りて忠ならぬは、われも亦耻づる所なり。
さればとてわが孫興邦はなほ乳の香ある机心うせず、且武藝を好める本性
なれば、かゝる助になるべくもあらず。彼が母は人並ににじりがきもすなれ
ば、教へて代寫せさせばやと、やうやくに思ひかへしつ。第七十七回より代
筆せさせて、一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗
字だも知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣、てにをはだにも辨へず、扁旁
すら心得ざるに、たゞ詞をのみもて教へ書かするわが苦心はいふべうもあ
らず。まいて教を承けて書く者は、夢路を辿る心地して、困じて果は打泣くめ
り。さて代寫一枚に滿つれば、讀反させて、又教へて傍訓を書かするに、熟字を
知らず、又句讀を心得ねば、讀む時或は字を脱し、或は無き字を添へて讀むめ
り。讀むすら容易からざるに、知らず心得ざる事を口授せられて書く者の艱

(一)伊勢國鈴鹿郡
筆捨山。

難を思へば、いと痛ましさに、幾度か止めばやと思ひしを思ひかへして、

筆捨(一)の松のふる葉も言の葉も

子等にをしへてかゝするぞ憂き

と打詠じて、かつ慰めつゝ、一二卷代寫させぬる程に、彼もやうやくに慣れて、苦心初の如くにあらず。扁旁などは稍辨へ知りて、言を費すも舌の疲るゝまでに至らず。篇中の挿繪は代寫せさすべき者なければ、われ只其の人物を圈點してもて書工に傳ふるに、こまかに注文を代寫させぬるのみ。稿本はさらなり、書畫工の寫本もわがいふ如く書けりやあらずや、心許なく思へども術なし。まいて文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に涉らざれば暗記の過あらんことを恐れて、命じて其の書を取らさせて讀まするに、漢籍は及ぶべくもあらず、假名まじりの古書と雖も、傍訓なきは得讀まず、強ひて讀ますれば、缺舌侏離にて要をなさねば、援用(ひきもち)ふべくもあらず。書かすることは教へもすれど、讀ますることはわが見るにあらざれば、いよゝ難儀にて、實にせん方なし。されども教を承くる者の困じながらも、倦くまでよく勉むるにあ

缺舌侏離
蠻夷の語。わか
らぬことば。

らざれば、此の十卷を綴り果して局を結ぶに至らんや。縫刺(ぬい)の技、薪炊の事なごこそ彼が職分なれ。文墨風流の事に代らせて其の要(もと)を做(な)さまく欲(ほ)するは、わりなしともわりなしと知りつゝも、月を累ねて今茲辛丑の秋、葉月二十日といふ日に、本傳の結局大團圓までやうゝ稿し果てたりき。

——南總里見八犬傳——

三 西哲訓言

我は宇宙の一部なり。宇宙は我の全體なり。故に我の智慧は宇宙の智慧なり。宇宙の本源より流出せるものなり。

萬物は皆自ら自己の歴史を描く。轉岩は山に其の痕跡を殘し、河は土地に其の溝渠を通じ、動物は地層に其の骨を遺し、炭は石炭に其の葉形を留むるなり。

文明なる人民は車を造れり。而も之と共に脚の力を失へり。(エマソン)
僧は愛のごとく盲目なり。傷つくことを厭はず、されど進みて撃つことを

Emerson.
米國の哲人。

(1) Hippocritus.
希臘の哲人。

懐る。(シエークスピア)
藝術は長く、人生は短し。(ヒポクリトス)
人の世界に生くるはたゞ一度のみ。(ゲーテ)
世界の歴史は世界の審判なり。(シルレル)
沈黙は深遠なること無限永劫の如く、雄辯は淺薄なること限りある時間
の如し。(カーライル)

吾人自ら缺點を有せざれば、他人の缺點を認むるに、しかく多大の愉快を
感ずることなからん。

(2) La Roche-
Foucault.
佛國の文人。

太陽と死との二物は熟視すること難し。(ラ・ロシフコー)

英雄の胸より流れ出づる鮮血は神聖にして、其の記憶は千古に芳し。

(3) Andersen.
丹の文學者。

(アンデルセン)

四 古學の傳統

平田篤胤

まづ第一に申して置かねばならぬことは、此方の學を古學といひ、學ぶ道

(4) 江戸時代の國
學者。秋田の
人。天保十四
年(二五〇三)
歿。年六十八。

を古道と申す故は、いにしへ儒佛の道、いまだ御國へ渡り來らざる以前の純
粹なる古の意と古の言とを以て、天地の初よりの事實をすなほに説き考へ、
其の事實の上に、眞の道をなはつてある事を明らむる學問である故でござ
る。

抑、此の學風の由つて來る其の始は、東照大神君其の絲口を開かせられ、公
子尾張の源敬公其の御遺意を紹介させられ、さて水戸中納言光圀卿大きに興
起あらせられた事でござる。此の君の世にすぐれておはせることは、世の人
の能く存じ居ること、即ち世に水戸の黃門様と申すは、此の御方のことで
ござる。此の君が世の中に唯々唐の學問ばかり行はれて、御國の古き御代の
事などは心とする者のなきことをお歎きなされ、第一には禁裡を殊の外御
尊敬あらせられ、數多の學者を御抱へ遊ばし、先づ世に有りとある古書を御
集めなされ、又諸國の神社佛閣及び在々に至るまで、あまたの人を分ち遣は
されて、いさゝか一枚二枚に足らぬものも、古き書物をば悉く御集めなされ、
それを明細に御吟味有つて、神武天皇の御代より、後小松天皇の御代まで、御

(1) 徳川家康。

(2) 徳川義直。

門
中納言の唐
名。

代は百代、年數二千年あまりの間の事をつぶさに御撰びありて、大日本史といふ歴史を御作りなされ、又古書はもとより堂上方の世々の御記録を始め、數百部の書物の中より、朝廷の御禮儀に關る事どもを御類聚なされて、五百卷餘の書となされたでござる。此の大業の御入用として、御高三十五萬石の内、十萬石を分けおかれまして、誠に數十年の御辛勞で、遂に御成就なされ、扨朝廷に奉られた處が、朝廷には御感斜ならず思し召し、右五百卷の御書物に、禮儀類典といふ題號を御つけ下されたでござる。又其の頃難波に契沖といふ人があつて、之は故有つて、眞言の僧とは成つたなれども、厚く御國の古を信じ學んで、中頃より亂れ來りし假名遣を古書の古言を證據として正し、和字正濫抄といふ書を著し、其の外いろ／＼發明の書物を作つて、其の名高く、光圀卿の御耳に入り、殊の外感じ思し召し、度々御使者を遣はされたが、契沖は固く御辭退申して罷り出でなだでござる。所が光圀卿には甚だ御慕ひなされて、(一)安藤爲章といふ御國學みくにまなびに志の厚い御家臣を契沖の門人に遣はされ、且萬葉集は殊の外古い歌集で、歌のみならず博く古を考へるの助となる

(一)水戸藩の儒者。

べき結構なる書物なれども、其の頃まで世にある所の註解何れも宜しくな
いに依つて、よく古に叶ふべき註を仕るべき由御頼みなされたでござる。契
沖畏つて、是に於て萬葉集の代匠記といふを撰んで差上げました。萬葉學は
是よりはじまつた事でござる。光圀卿これを御覽なされた所が、今までのあ
らゆる註釋とは事かはり、悉く古言古意を尋ねて之を記し、甚だすぐれたる
物ゆゑに、大きに御悦びなされて、白金千両、絹三千匹を下されたでござる。契
沖其の賜物を更に蓄へず、悉く貧窮の者に與へられたといふ事で、又右の代
匠記を作るとて、夥しく古書を集め考へた時、其の餘力を以て古今集にも註
を下して、之をば餘材抄と名を付けたでござる。此の註釋は其の時分まであ
つたのとは雲泥の違で、誠に結構なものでござる。扨契沖は元祿十四年正月
廿五日に、年は六十三歳で身まかられた。其の著した書物すべて廿五部、卷數
百廿卷餘もあるでござる。

此の契沖に追ひすがつて、荷田宿禰春滿翁かだのすくねあつまる俗名を羽倉齋宮うづらさいみやといふ人が出
られて、大きに御國の學問を勵み弘められて、四方に其の名高く、既に御國學

の學校を京都に建てようとして公の御免を受けられ、其の地をば東山にしつらへようと思はれたところが、其の事果さず、病によつて身まかられたでござる。此の翁著述の書すべて數十部、卷數百卷あまりありたるよしなれども、今纔かに遺りたるもの五六部、數卷ならでは無いが、我が古道學の道紀を立てられたのは此の人でござる。此の次が賀茂の縣主眞淵の翁、通名を岡部衛士といふ人が出られて、家の號を縣居とつけられたに依つて、縣居の大人また縣居の翁なども申すでござる。扱此の翁荷田の大人の門人となり、其の本志をついで、勤學いたされたでござる。

扱此の眞淵の翁は、其の師春滿翁の上を今一段上つて、なほ深く考へ、始めて古の道を明らかに得んとするには、漢意佛意を清く捨てはてねば眞の處は得がたく、歌を詠むも、古の言を解くも、みな神代の道を知るべき便なる由を、懇にとき誨され、扱遂に田安の殿に召出され、御國學の御師範を申し上げられたでござる。其の門人にも勝れた人が多く、藤原宇萬伎、楫取魚彦、また近頃までも在世した加藤千蔭、村田春海なども、皆此の翁の弟子でござる。扱此

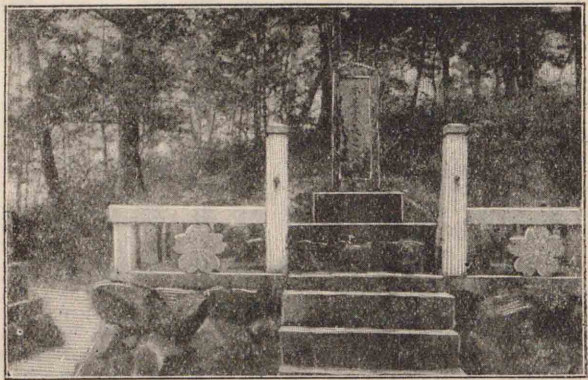
の翁は明和六年十月晦日に、行年七十三にて身まかられたでござる。其の著された書物が四十九部、卷數が百卷ちかく有るでござる。

此の次は即ち拙者どもが師と仰ぐ本居先生平阿曾美宣長の翁で、初は醫を業とせられたに依つて、本居舜庵といはれましたが、後に紀伊國中納言殿に召出されました、中衛と改められたでござる。其の先祖は桓武天皇の御裔、池大納言頼盛卿六代の後胤、本居縣判官平の建郷と申した人の末にて、伊勢の國松阪の人で、家の號を鈴の屋とつけられたに依つて、世に鈴の屋の大人とも、鈴の屋の翁とも申すでござる。扱此の翁の學問のいみじきことは、世に類なく、それは其の著された書どもを讀み明らかむれば、能く知れることで、申すまでは無けれども、其の初は、漢の學問を深く學ばれて、それより御國の學に移り、縣居の大人に従つて、其の志を受繼がれ、學問の道に於ては、古より類なき大功を立てられたでござる。其の御心緒の事をかい摘んで申さば、先づ其の著されたうひ山踏といふ書に言はれた趣は、人として人の眞の道は、どうしたものぞといふことを知らずに居るべきことではない。學問の志な

き者は、そりやごうも爲方は無けれども、かりそめにも其の志があるならば、同じくは眞の道の爲に、力を用ふべきことぢや。然るに道の事をばなほざりにさしおいて、唯末の事にばかりかゝつらつて居るといふのは、それは學問する者の本意ではないと言はれ、又學問は初より其の志を高く、大きに立て、其の奥の所まで極め盡さずば止むまいと、堅く思ひこむがよい。此の志が弱くては、おのづから倦怠ることが出るものぢやとも言はれましたでござる。此の通り人にも教へられる程のこと故に、自分は實に此のとほりいたされたでござる。是も亦其の著された書ども讀めば、能く分りますでござる。

其の門人帳を見まするに、弟子のない國は六十六箇國の内に、唯二箇國ならではない程のことで、殊に享和元年の春上京致されて、四條に舍つて居られたみぎりなどは、公家の御歴々がた、學問を公に心がけらるゝ御方は翁の宿へ御尋ねありて、御入門なされ、世にも人の知つて居る中山大納言殿を始め參らせ、富の小路新三位殿、芝山中納言殿など、其の外夥しくありましたでござる。既に其の頃御歌の宗匠とあらせらるゝ日野一位資枝卿ですら、御感

心の餘りに、其の御孫日野中宮權大進殿と申すを遣はされ、翁を師と御頼みなされて、其の始めて入らせられた時の御歌が、和歌の浦に行方を辿る海士



(山室山阪松勢伊) 墓の長宜居本

小船、今より君を梶とたのまん」と仰せられたでござる。此の外にも御尋ねなされる御方々が、各此の心ばへの御歌を御詠みなされ、何れも翁をさして本居先生、鈴の家の翁、又は鈴の屋の大人と御尊み遊ばし、御頼みなされて、翁の講釋を御聽きなされ、閑院の宮様、妙法院の宮様までも翁を召されて御慕ひ遊ばし、實に千古の昔より、かやうの事はありは致さんでござる。さて翁の著された書物が五十五部、卷數百八十餘卷あつて、何れも一學問する者は、

常に傍を放されぬ物で、一部一冊として、是はと人の手を拍たぬものは無いでござる。扱此の先生は享和元年九月廿九日に、御年七十二にて身まかられ

たてござる。猶是等のことは別に委しく記した物があります。今は彼の驅けて通ると申す程のこと故に、大略の中の又大略を申すのでござる。

—古道大意—

改訂帝國讀本卷八終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。本)

乃	函	凡	凡	滅	涼	準	准	况	決	冒	冎	兔	免	佞	仍	兩	通用正	
刃	函	凡	滅	涼	準	况	決	冒	冎	兔	免	佞	仍	兩	兩	兩	通用正	
回	噴	器	唇	叙	収	雙	廠	厨	卽	卑	勻	効	劔	劔	剪	剪	通用正	
回	噴	器	唇	叙	収	雙	廠	厨	卽	卑	勻	効	劔	劔	剪	剪	通用正	
懺	憇	恒	徃	廻	廩	并	帽	剋	實	寇	冤	墻	塚	塚	場	場	通用正	
懺	憇	恆	往	迴	廩	并	帽	剋	實	寇	冤	牆	冢	冢	場	場	通用正	
桿	朽	央	晋	昂	既	整	携	捏	插	拔	拿	拘	戲	戲	載	載	通用正	
杆	朽	央	晋	昂	既	整	攜	捏	插	拔	拏	拘	戲	戲	載	載	通用正	
猷	猫	猪	猿	熔	焔	潛	潤	涅	氷	毒	殺	殲	歛	楮	楮	楮	通用正	
猷	貓	豬	猿	鎔	焰	潛	潤	涅	冰	毒	殺	殲	歛	楮	楮	楮	通用正	
穎	稟	礪	砲	盜	蓋	盃	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	瑣	玄	獵	獵	通用正	
穎	稟	礪	礪	盜	蓋	盃	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	瑣	玄	獵	獵	通用正	
働	俟	京	亡	並	万			織	紀	穀	粘	籤	纂	豎	竊	秘	頤	通用正
働	埃	京	亾	並	萬			織	紀	穀	黏	籤	纂	豎	竊	祕	頤	通用正
廝	廁	勅	冲	富	冊	同	膝	膝	腸	豚	胆	聳	耻	羹	群	罰	纏	通用正
廝	廁	敕	冲	富	冊	字	膝	膝	腸	豚	膽	聳	恥	羹	羣	罰	纏	通用正
妍	妊	野	坂	嚙	叶	表	衛	衛	蛩	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥	通用正
妍	妊	埜	阪	齧	協	(もいづれにて)	衛	衛	蛩	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥	通用正
峯	峩	岳	婚	娉	姊		豹	豹	象	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	通用正
峰	峨	嶽	婚	聘	姊		豹	豹	象	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	通用正
微	強	弊	弊	庵	嶋		鎖	鎖	鐵	針	釜	隣	輒	軟	贗	贗	贗	通用正
微	強	弊	弊	菴	島		鎖	鎖	鐵	針	釜	鄰	輒	軟	贗	贗	贗	通用正
村	普	考	慙	慙	忘		鶴	鶴	鬱	鬪	麩	馱	隸	隙	隔	隔	間	通用正
邨	普	攷	慙	慙	忘		鶴	鬱	鬪	麩	馱	隸	隸	隙	隔	隔	間	通用正

附録

柿	案	基	棕	楫	稿	概	朴
柿	椀	棋	椶	楫	稿	概	朴
毘	汙	温	烟	无	猪	狸	睹
毗	汚	温	烟	无	猪	狸	睹
砧	稿	競	筍	筍	糝	糝	糝
砧	稿	競	筍	筍	糝	糝	糝
網	総	縹	縹	縹	縹	縹	縹
網	総	縹	縹	縹	縹	縹	縹
荒	蔭	虱	枉	詭	諱	谿	踪
荒	蔭	虱	枉	詭	諱	谿	踪
躑	遁	鋅	鏹	陰	雁	雞	駟
躑	遁	鋅	鏹	陰	雁	雞	駟

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字
トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中
* 標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從
ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

巨 互
ワタル。「連互」
桓ニ同シ。
笨ニ同シ。アラシ、寃、粗。
カラダ。

但	但	借	借	胃	胃	刺	刺	台	台	后	后	商	商			
但	但	借	借	胃	胃	刺	刺	台	台	后	后	商	商			
タマシ、タマ。	「但馬」	ツタナシ、拙劣。	ミダリガハシ、猥。	身分ヲ越エテオゴル。「僭越」	カプト、兜。「甲冑」	ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」	カナフ、叶。	オビヤカス、脊。	サス。「刺殺。刺客。名刺」	モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」	星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」	ウテナ、ダイ。	ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。	キミ。「皇后」	アキナヒ。	モト、本。

壺	壺	姫	姫	託	託	擔	改	改	槍	鎗	欠	糸	糸	絲
壺	壺	姫	姫	託	託	擔	改	改	槍	鎗	欠	糸	糸	絲
ツボ。	ツボ。	ミチ、宮中ノミチ。	ツ、シム。	ヒメ。	拓ニ同シ。オス、ヒラク。	ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。	ハラフ。又アグ。	ニナフ、カツク。	鬼ヲ追フトイフ星ノ神。	アラタム。	ヤリ。	アケビ。「欠伸」	カク。「缺席」	イト。

羨	羨	蟲	蟲	詔	詔	証	証	迄	迄	選	選	撰			
羨	羨	蟲	蟲	詔	詔	証	証	迄	迄	選	選	撰			
支那ノ地名。	ウラヤム。	魚介類ノ總稱。又ママシ。	シム。	ワビ、ワブ。「詔狀」	訛ニ同シ。アザムク。	ヘツラフ。	ウタガフ、疑。	アカシ、シルシ。「證明」	イサム、諫。	禮ノ古字。	ユタカ。	マデ。	ユク、行。	エラブ。(ヨリトル)	エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻シキヤク 隙シヨク。[退却]
キタノ「鍛錬」
シヨク、シヨク、シヨク。

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かひ(詮の意の場合) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、遠
 しまふ 仕舞ふ
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡
 でたらめ 出鱈目

とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ヶし
 やたら 矢鱈
 やはり 矢張

附 録 終

大 大 大 大 大 大
 正 正 正 正 正 正

大 大 大 大 大 大
 正 正 正 正 正 正
 七 七 七 七 七 七
 年 年 年 年 年 年
 十 十 十 十 十 十
 二 二 二 二 二 二
 月 月 月 月 月 月
 十 十 十 十 十 十
 四 四 四 四 四 四
 日 日 日 日 日 日
 改 改 改 改 改 改
 訂 訂 訂 訂 訂 訂
 三 三 三 三 三 三
 版 版 版 版 版 版
 發 發 發 發 發 發
 行 行 行 行 行 行

改訂帝國讀本

價 定	卷一、二各金參拾八錢	卷三、四各金參拾六錢	至自卷十五各金參拾錢
-----	------------	------------	------------



著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 合 資 會 社 富 山 房

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 合 資 會 社 電 新 堂

發 行 所

東 京 市 神 田 區 裏 神 保 町 九 番 地

合 資 會 社

富 山 房

長 電 話 本 局 一 〇 三 六 本 局 四 一 三 〇 番 振 替 口 座 東 京 〇 五 一 番

